



人生儀礼 ハンドブック

～人生を豊かに彩るために～

大阪教区 重点プロジェクト推進部会 編

いあいさつ

宗門より二〇一二（平成二十四）年度に重点プロジェクトが提唱されて以来、教区・組・寺院・教化団体などの活動主体が、それぞれの特性に応じて独自に実践目標を定め、特色ある活動を推進してきました。

大阪教区では、第一期、第二期のあわせて六年間、現代社会が抱える諸問題を「葬送儀礼」に集約して、実践目標を掲げて推進してまいりました。その「葬送儀礼」を取り組むなかで、故人を弔う墓制（お墓）や人生における儀礼・儀式の大切さについて学びを得ました。

そして第三期重点プロジェクトでは、宗門全体の課題である「貧困問題」とあわせて、教区のこれまでの取り組みであった「葬送儀礼」での学びを継承しつつ、人のいのちの歩みにかかわる儀礼（初参式・七五三・成人式・結婚式・お葬式・お墓（納骨など））のもつ宗教性とその大切さを啓発することを、教区独自の実践目標として「人生儀礼」に取り組むことといたしました。

人は、誕生、成人、結婚、死という人生の大きな節目ごとに儀礼を営んできました。このことは葬送と同様に、言語や文化、宗教にかかわらず、全人類にみられる現象です。この「人生儀礼」について、異なる分野の有識者を招聘し二回の協議会を開催しました。その中で、日本の民俗宗教としての営みや、今日の「高齢多死社会」における受け止めなど、民俗学や統計調査の視点からも研鑽を深めることができました。あらためて「人生儀礼」とは、人のいのちの歩みのうえで宗教性をもった重要な営みであり、また、求められていることを実感したことであります。

今日の日本の社会情勢は、過疎・過密化の進行と、少子高齢化や核家族の増大の中にあります。これに伴い、これまで寺院が、存立の前提としてきた社会構造も変化しています。その中で、「先祖代々浄土真宗の門徒である」という家の宗教意識や、「浄土真宗が私の信仰」という、自覚的な認識を持たれる門信徒も少なくなっています。この状況から推測すると、これまでのような代々続いた寺檀関係を基礎とした伝統的な伝道活動だけでは、教線の維持のみならず、み教えを後世に伝えることは難しくなると思います。

本書に示された「人生儀礼」への提案は一つの考え方ですが、現代社会において、今後の寺院活動は、多種多様な社会の要望にも対応していくことが必要となりますでしょう。

教区内のご寺院の皆さまには、どうぞ本書をご活用いただき、今後の寺院活動の一助としていただければ幸甚に存じます。末筆ではありますが、本書作成に際しご協力をいただきました皆さまに、衷心より厚く御礼申しあげます。

大阪教区教務所長 山本政秀

発刊に寄せて

「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）も活動を始めて四期八年が経過いたします。「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会では、教区独自のテーマとして、「葬送儀礼」から「人生儀礼」へと、社会的な問題から文化的な問題まで幅広く研修と提案を試みてまいりました。

宗派が策定した次期「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）総合基本計画・重点プロジェクト「二〇二〇（令和二）年度から」には、次のようなくだりがあります。

「現在、布教伝道の現場では…子ども・若者へのご縁づくりや国際的な伝道、法要や葬送儀礼の簡略化をはじめとする変化など様々な困難な課題に直面しています。これらの課題克服に向けて、ご法義が伝えられていくよう一人ひとりの創意工夫が求められています」

確かに、若い世代との結びつきの希薄化、法要や葬送儀礼の簡略化は事実であり、寺院の存立において「困難な課題」となっています。旧来の村落共同体・血縁共同体が崩壊していく中で、これまでの秩序の上に安住し、葬儀・年回法要・月命日などの儀礼に依存している活動のあり方が問われているのかもしれない。

往生後の儀礼だけに頼るのではなく、この世に生を受け、育ち、齢を重ねていくその人生を、み仏に願われた生涯としてその節目節目に様々な儀礼を行っていく。「人生儀礼」とは素敵な言葉ですね。命を授かった喜び、幼児から少年へ。青年から大人へ、壮年へ。初参式から葬儀にいたるまで、まさにゆりかごから往生までの人生に、寺院・僧侶がかかわっていくことは、まさしく「子ども・若者」とどまらず壮年の方々や、これまでご縁のなかった方々との「ご縁づくり」にも道を開くものであり、寺院の新たな可能性を示すものです。

この『人生儀礼 ハンドブック』人生を豊かに彩るために』は、組内での研修テキストとして、また各寺院においては実践の手引きとなります。各組各ご寺院においてご法縁をひろげていかれるよすがとなれば幸いです。

「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会委員長 小倉雅昭

はじめに

浄土真宗本願寺派大阪教区に、その活動の一端として重点プロジェクト推進部会が設けられて八年になります。重点プロジェクトとは、中央から示された一律の方針を各地方単位や各個単位でそれぞれの地理的・歴史的条件のもとに運営していくという、これまでの近代的な運動のあり方を反省し、それぞれがそれぞれの地域事情や特性における問題をテーマ化して取り組んでいくという活動です。

当教区では、「葬送儀礼」をテーマに六年間活動し、二冊のテキストにその成果をまとめました。「葬送儀礼」がテーマにあげられた背景には、日本有数の都市部である大阪が、その都市化ゆえに伝統的な宗教共同体が衰退し、そのことの典型的な現れとして伝統的葬送儀礼への関心の低下が著しいことや、衰退した共同体に代わって葬儀ビジネスが巨大化し、利潤追求が葬儀の世界を動かす原動力になってきていること、しかしながら、人々の死後への関心が薄れたわけでは決してなく、伝統宗教の今日に至る儀礼の進展が人々の関心にリンクしなくなってきたこと、むしろ、伝統宗教への漠然とした不信感が今日の葬送儀礼をめぐる状況をまねいた大きな要因となっていることなどがあります。

伝統宗教への不信感の中身には、近年では葬送儀礼が、それぞれの宗教や宗派での内部の信仰世界へのコミットだけを前提として考えられてきたことがあり、葬送儀礼とは人の人生にとって必要不可欠なものであり、全人類的な営みであり続けてきたという葬送儀礼のもう一つの重要な側面を軽視してきたことがあります。

宗教は、人の一生を通じた生と死にかかわり続けてきました。人は、宗教から一生を生き抜く力を得てきました。そこで、当推進部では、「葬送儀礼」というテーマを発展させ、人の一生の節目節目に、その人生にかかわり続ける「人生儀礼」をテーマとして、新たに二年間取り組んでまいりました。私たちは浄土真宗本願寺派という特定の宗門に帰属するものであり、人生儀礼が、それを通じて少しでも多くの人に浄土真宗の教えに出あってもらえる機会となることを願ってやみません。また、同時に、葬送儀礼と同様にすべての人が営み続けてきたにもかかわらず、その儀礼としての働きが軽視されてきた人生儀礼をいま一度捉えなおすことで、儀礼は、人生を生きる力や幸せや決意を与えることができるということを経験してもらえる機会となることを願います。

人生儀礼ハンドブック

（人生を豊かに彩るために）

大阪教区 重点プロジェクト推進部会 編



目次

ごあいさつ	1
発刊に寄せて	2
はじめに	3
目次	6
人生儀礼とは	7
1. 初参式	11
2. 七五三	17
3. 入学式・卒業式	23
4. 成人式	31
5. 結婚式	37
6. 就職・転職・退職式(定年式)	48
7. 新築・改築・引っ越し式	52
8. 入院・退院	57
9. 厄年	62
10. 長寿祝い	67
11. 生前葬	71
12. 葬儀	76
13. 次第	83
あとがき	85
記録	88

人生儀礼とは

人生の大きな節目ごとに、人はそれまでの古い自己から新しい自己へと生まれ変わるべく、宗教儀礼をつとめてきました。このことは、日本といった特定の地域に限られたことでも、仏教やキリスト教といった個々の宗教に限られたことでもなく、全人類に見られる現象です。人類が、その歩みとともに、人生の節目につとめてきた、そうした儀礼を総称して人生儀礼（通過儀礼）といいます。そこで象徴的に経験されることは、古い私に死し新たな私に生まれるという、擬死と再生です。疑似的にいったん終えられた「いのち」は、終えられたからこそ新たな「いのち」として生まれることができます。こうした経験の一つの大きな背景が、浄土教系仏教では「信に死して願に生きる」と表現されるような宗教経験であり、また大きな背景が、文字通りの肉体的「いのち」の死と転生です。肉体的「いのち」や人格的「いのち」よりもいっそう深い、「抱かれないのち」や「授かっていたいのち」「賜っていたいのち」「願いに生かされたいのち」などと表現される、大いなるものとの関係によって目覚め、経験される宗教的「いのち」です。誤解を生む言葉ですが、巷間で魂や霊性と呼ばれるものにも通じる「いのち」です。こうした目に見えない大きな「いのち」への目覚めを底流として、人生儀礼では、その人生の節目ごとの「いのち」の更新が宗教儀礼によって経験され、「いのち」が成長します。それは、目に見えるこの世界を超えた仏や神がかかわる儀礼、宗教儀礼だからこそです。

学生時代、インドネシアのバリ島北部の村でヒンドゥー教による成人式に出席したことがあります。成人式といえば、日本でももとは元服といいましたが、世界の多くの地域・宗教で十二、三歳のときにつとめられます。バリ島でも、その年頃の少年が受式しました。式前に挨拶に来てくれたのですが、その年齢ですから仕方がありません、母親の陰に隠れるように、これから自分に起こることへの不安や日本からの参列者への恥ずかしさに、消え入るような小さな声でおどおどと挨拶してくれました。バリ・ヒンドゥーの成人式では、ヤスリのようなもので歯が少

し削られます。試練ですね。神と有縁の人たちの前で覚悟が試されます。そうして、無事に式を終えた少年は、再び挨拶に来てくれたのですが、式前とは打って変わって、その堂々とした態度としっかりした言葉に気おされてしまうほど、彼の変化に心底から驚きました。少年は完全に大人になっていました。世界の各地で行われている、こうした儀礼には、例えば、大人と一緒に初めてモスクに礼拝する少女のプライドと喜びに満ちた笑顔や、ミャンマーで顔に化粧をほどこし得度式にむかう少年の力に満ち溢れた姿、太陽に向かって踊るアメリカ原住民の少女の真剣な顔など、少年や少女が儀礼を通じてまさしく成長する姿が見られます。人が成長するということ、ゆるやかな坂道を途切れなく徐々にゆっくりと登るようには成長しません。ずっと同じ状態が続いた後に突然に段を上るように成長します。運動に譬えれば、100メートルを15秒で走る者が、次の週には14・9秒、また次の週には14・8秒と順当にタイムが縮まるということはありません。ずっと15秒が続き、ある日に突然それが14・5秒へと縮まります。人は階段を登るように成長し、人生におけるその階段を登らせるのが、人生儀礼です。合理的に考えれば、それまでの自分と受式後の自分とが全く違う自分になるということはありませんが、しかし、実際に経験上、人は変わるのです。

人は、ものを考えるというとき、二通りの方法で考えます。それが論理と経験です。論理的にものを考え、整理し説明することは、人間に与えられた偉大な能力ですが、しかし、経験によってしか説明できない世界の営みの豊かさを人は持っています。しかしながら、私たち近現代人は、近代という時代の傾向によって、どこまでも論理を先行することこそが正しいという態度を持っています。論理的に考えることには、もともと、それを徹底し、例外なくすべてをその論理によって説明できればできるほど高次に正しいという性質がありますが、それがゆえに説明できないことは正しくないと断じてしまう、あるいは経験をゆがめて論理によってすべてを説明しつくそう

としてしまうということを伴います。いま、こうして儀礼を考えると、儀礼とは経験的な要素に大きく依っていることを考え直さなければなりません。「人はそう変わるものではない、その人らしさといった一貫した自我がある」といった論理と、儀礼による人の成長という経験的事実とは、別のことがらです。あるいは、「どこまでも罪深く、何ひとつ善いことのできない変わらない本性」を見つめて内省化していくことと、実際の成長をもたらす儀礼をつとめることとは、別次元の作業です。儀礼を通じて、本人はもちろん変わり、その者をとりまく有縁の人たちや社会からの扱いも変わる、そうした経験が共有されるなかで育つ次世代も、その共有がゆえに変わることができるという、こうした経験の相続こそが、儀礼の重要な要素です。

人生儀礼には、擬死と再生、それまでの自分に死して新しい自分に生まれ変わり、成長するにあたって、多くの目に見える「擬」と変化が用意されています。それまではなかった名前がいのちに付られ、幼名、童名、諱への改名や、戒名、法名、クリスチャンネームといった名前の変化、産着、晴着、袴着、帯、白無垢、赤頭巾、白装束といった着物や髪型や化粧の変化、それぞれの儀礼に用いる象徴的な道具、独籠や潔斎や沐浴、くぐり抜けや飛び降りなどの分離と試練など、目に見え身をもつての経験によって、それまでの自分から新しい自分への、擬死と再生があらわされます。そして、それが、仏や神のみまもる場所において経験されることで、単なる人間社会の間の出来事ではない、いのちの質にかかわる出来事として経験されます。新しいスーツや制服をきて臨む入社式や入学式などでも十分にこの変化が生じますが、それが宗教的な空間においてなされるのですから、その変化と成長は大きなものとなるはずです。そして、その変化や成長の主役は、もちろん本人です。人生儀礼の主役は本人であり、そして、その成長に際して自らもまた成長する有縁の人々も主役です。仏や神は、その大きないのちの成長をみまもり、いのちに目覚める経験を知らせてくれる存在です。人の行いの世界だけで成長したかのごとくに報告するだ

けの「対象」ではありません。

さて、こうした人生儀礼の一つの大きなゴールが、その人の死によってつとめられる葬儀です。死にむけて人のいのちは成長し続けます。これは少し言い過ぎになりますが、人生の節目ごとに擬死と再生という、いのちの更新を経験する人生儀礼は、死という最終的ないのちの成長、いのちの一つの完成にむけての予行演習です。いまの日本社会では、文字通りの死に際して執行される葬送儀礼がつとめられることで、その人のいのちが決定的に更新されるという経験が、まだ辛うじて社会に共有されています。しかし、一方で、近代以後、葬儀を宗教儀礼によってつとめることへの論理的な疑問もゆっくりと広がってきました。このことを、人生儀礼の側面から考えてみると、死まで一度も宗教儀礼を通じたいのちの成長、すなわち擬死と再生によるいのちの更新の経験がないものが、つまり、一度も予行演習をしたことがない本人や周りのものが、いきなり本番の死をむかえて儀礼をつとめることの重要性を感じることは難しいのではないのでしょうか。長寿社会となり、幼いころに祖父母の葬儀は経験したが、孫を持つ歳になっても父母の葬儀はまだ経験していないという、葬儀の間隔が非常に長い時代となっています。その間に、いのちの更新をなにも経験していないということになっているのかもしれませんが。

人生儀礼をつとめるということには、執行する宗教者の側からいえば、それぞれの教え、寺社や教会との縁を結んでもらうという大切な意義があります。しかし、それだけではありません。人生儀礼をつとめるということには、人が「いのち」の本質に目覚めていく、「いのち」の成長を経験していくという、大きな意義があります。人間にとって必要不可欠なもの、だからこそ、特定の地域や宗教に限ったものではなく、全人類が経験してきたものが、人生儀礼といえるでしょう。

1. 初参式

一般には子どもが生まれて一カ月ほどすると、お宮参りといって神社にお参りする人が多いようです。「お祝いごとはお宮さん、死にかかわる悲しいことはお寺さん」という意識があるのではないのでしょうか。お寺にお参りし、阿弥陀さまへ新しい「いのち」の誕生を報告し、感謝の思いを表すことも大切であると伝えたいものです。

生まれた赤ちゃんにとっては人生初のお寺参りになりますが、親にとって子どもの誕生は、親として生き



る出発点でもあります。子どもの誕生によって恵まれた尊い仏縁が、家族そろっての聞法生活の始まりとなり、小さないのちがお念仏の環境の中で育つきっかけとなるよう心がけたいものです。

※初参式のポイント※

初参式の時期としては、誕生後、三十日から百日ぐらいの期間に行うことが多いようです。記念日となるよう、一歳の誕生日のお祝いを兼ねて行うのもいいでしょう。もちろん、いつまでにやらなければいけないという決まりはありません。

四月の花まつりや五月の親鸞聖人降誕会に合わせて、合同初参式を行っている寺院も多いようです。次第については『法式規範』に、勤行、「礼讃文」の唱和、「初参式についての消息」の拝読、法話、仏教讃歌などがあげられています。そのほか「私たちのちかい」または「浄土真宗の生活信条」の唱和を取り入れてもいいでしょう。

また、焼香だけでなく、赤ちゃんに塗香を塗るという儀式を取り入れるなど、宗教的な荘厳さを醸し出す工夫も大切です。

記念行事としては、記念品の贈呈や記念撮影、会食などがあります。赤ちゃんの手形や足形を取って、親からの手紙とともにお寺で保管し、二十歳の成人式で手渡すという寺院もあります。（写真掲載33、34ページ）

この初参式を機縁として、今後「七五三」も寺院へ参詣することを勧めるのもポイントです。

初参式表白の文例

敬って西方願王阿弥陀如来 人界の教主釋迦如来
並びに十方三世一切の三宝に白して言さく

本日ここに恭しく尊前を莊嚴し懇ろに妙典を誦
して

俗名〇〇〇〇の初参式を執り行う

夫れ惟みれば

人界に生を受けることは甚だ稀なり

しかしながら不思議の因縁により

今新たなる命の誕生をみる

しかのみならず

無上甚深微妙の法は百千万劫にも遇うこと

難きなかに

只今 初めて如来の御前でみ親に抱かれ

仏願を聞くことは真に尊く、

さらに親族有縁ともどもに その勝縁に連なり

念仏申す身となることもまた有難きことなり

希はくは 〇〇〇〇が

健やかに朗らかにこの人生を歩まれ

如来の大慈大悲のもと

参詣の一同とともに念仏薫る日々のなかで

真のしあわせを得る身とならんことを

伏して乞う

三宝 哀愍摂護したまへ

勤行に用いる和讃

超日月光この身には
念仏三昧おしへしむ
十方の如来は衆生を
一子のごとく憐念す (一一四)

如来浄華の聖衆は
正覚のはなより化生して
衆生の願樂ことごとく
すみやかにとく満足す (一三二)

経道滅尽ときいたり
如来出世の本意なる
弘願真宗にあひぬれば
凡夫念じてさとるなり (一八八)

はかり知れない縁を受け

一九八六（昭和六十一）年五月二十一日に本山で勤修された宗祖降誕会で、即如ご門主（前門さま）は「初参式についての消息」を發布されました。

このご消息の冒頭に「人間として、この世に生を受けることは、きわめて得がたいことであります。今、はかり知れない縁あっていのちを受け、さらに遇いたい仏法に遇って、尊い人生を歩み始められましたことは、まことにおめでたいことであります」とあります。このお言葉をいただいて、たくさんいのちの中から、人としてのちを受け、そして父母と共に仏前にお参りできることは、なんと不思議なご縁であることかと、深く考えさせられます。

二千五百年も前のお釈迦さまのお話です。ある時、お釈迦さまが弟子の阿難尊者と川原を歩いておられました。急に足を止められたお釈迦さまは「阿難、すまないが足元の砂を手ですくってみてくれないか」と言われました。そして、「足元の砂と手のひらの砂とでは、どちらが多いだろうか」と尋ねられました。

阿難尊者は「もちろん、手のひらの砂は比べ物にならないほど少ないです」と答えられました。

するとお釈迦さまは「その通り。この世の中にいのちあるものはたくさんいる。土の中で一生を過ごすものも、水の中で一生を終えるものも、空を飛んで一生を送るものも、目に見えないような小さなものから、人間の何倍もある大きなものまで、どれほど多くの生き物がこの世にいるか。その中で、人間として生を受けたものはどれくらいだろう。それはちょうど足元の砂に比べて、手のひらの砂の数くらいだろう。人間に生まれたことをもう一度よく考えてみたいものだ」と話されたのです。阿難尊者は何度もうなずかれました。

続けてお釈迦さまは「阿難、手のひらの砂を親指の爪の上にのせてくれないか」と言われました。そして「手のひらの砂と爪の上の砂はどちらが多いだろうか」と尋ねられました。

阿難尊者は、前と同じように「比べ物にならないほど爪の上の砂が少ないです」と答えられました。

それを聞いたお釈迦さまは「人間に生まれたものは手のひらの砂の数くらいだが、人間に生まれたことの

意味をかみしめ、人間として生きることの喜びを知っているものは爪の上にのっている砂の数ほどしかないのだ」とやさしく話されたのです。

阿難尊者は「本当にその通りです。もう一度、人間に生まれたことをよく考えてみたいと思います」と深くうなずかれたのでした。

「人身受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今すでに聞く」という礼讃文（三帰依文）のお言葉は、この話をまとめたものといえるでしょう。

私たちが人間としてこの世に誕生できることはまれなこと、さらに、その中で仏法に遇うことのできる人はまことに少ないのです。人間としてこの世に生を受け、仏法に遇えたことを心から喜びましょうというお釈迦さまのお言葉が、いたく身に染みてきます。

確かに、よくぞこの人間の身を受けることができたという深い感慨は、遇いがたい仏法に遇うことによつて、初めて知らされることです。まさしく親鸞聖人の「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ（ああ、この大いなる本願は、いくたび生を重ね

でもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経て獲ることはできない。思いがけずこの真実の行と信を獲たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ」というお言葉の深い意味を感じさせられます。

参考として

お食い初め

お食い初めと呼ばれる儀礼があります。文字通り、初めて食事をする儀礼ですが、生後百日ほどで行われるため、本当にものを食べるわけではありません。象徴的に食事をする、食事を模する儀礼です。初めて箸を使うので、地方によっては「箸初め」や「箸揃え」とも呼ばれ、歯が生え始める時期であることから「歯がため」とも呼ばれます。また、百日ごろに行われるため、「百日祝い（ももかいわい）」とも呼ばれます。その子が一生食べるに困らないようにとの願いを表した儀礼です。

場所によって異なりますが、焼き魚や飯、煮物、吸

い物、餅や酒をお膳にのせて、幼児に食べさせる真似をします。石や硬い食材を器に盛るところもあり、これらは、その子の歯が丈夫になるようにとの思いでしょう。食べるに困らないとは、食べるものに恵まれると同時に、丈夫な歯に恵まれることと考える面もあるようです。齢という字をみても、生きることと歯が重ねて捉えられていることが分かります。生きること、は食えることという、人類が経験してきた、いのちの大切な側面に関しての、願いが込められた儀礼がこのお食い初めといえるでしょう。

他のいくつかの人生儀礼にもみられることですが、このお食い初めにも、あらかじめ祝うという要素があります。まだ実際に食べるわけではありませんが、食えることができたとして祝います。前祝いですね。あらかじめ祝うことによって、いつそう大きく深い願いを表しています。また、食べるということには、「同じ釜の飯を食う」という表現があるように、人々の心の絆を深めるという作用もあります。私たちも、法事や法要の後に食事をともにすることがよくありますが、これも単なる付録のお楽しみ会ではないことはよ

く感じとられていることでしょう。寺院によつては代々長年にわたつて同じメニューが引き継がれており、この同じものを父母も、さらに上の世代も食べていたことを思いながらいいただくことは、自分のいのちを導いてくれた大きな流れを感じ取り、同時に物のいのちをいただくなくては、生きることができない我が身であることを知らされ、感謝の念をいただくことでもあります。お食い初めでは、新たな子どものいのちもこの流れの中にあることを確認し、得がたき人のいのちを授かったことの不思議さと、仏の縁に恵まれたこととの不思議さに、食べるという行為を通して感謝する場であつてもよいかと思ひます。

お食い初め表白の文例

敬つて大慈大悲の阿弥陀如来の御前おんまえに白もうして言もうさく

本日ここに俗名○○○○

お食い初めの儀にあたり

恭しく尊前を莊嚴し 懇ろねんごに聖教を誦誦し奉る
夫れそ惟おもんみれば

お食い初めは古来より 我が子おんじき飲食に
窮きゆうすることなきを願う儀にして

その親心は幾星霜いくせいそうを
経ふるとも変わるところなし

されどまた 飲食とは命をいただき
自らを存ながらえることなり

弥陀の本願を聞くものはこれを知るものなり

つつしみて食の来由を尋ねて味の濃淡を問はじ
つつしみて食の功徳を念じて品の多少を選ばじ

と申すはこの意なり

食を前に合掌するものは

命に思ひを致し深謝すべし

希こいねがはくは この子が今生こんじょうに足る飲食を受け

親族有縁ともどもに念仏薫る食卓を囲まれんことを

敬つて申す

2. 七五三

七五三と聞くと、宮参りであって、仏教とは関係のない俗習であると考えられる方も多いでしょう。確かに、日本では特に明治期以後、宗教行事のすみ分けといえるものが進み、七五三には神社にお参りすることが常態化していますが、子どもの成長を喜び願うことに、宗教の別は本来ありません。築地本願寺では、「めぐみの参拝式」として、十一月中旬に行われており、そこではこのようにうたわれています。

慈しみのひかりのなか、健やかに育まれた喜びと、子どもの人生、また親としての人生をココロのよりどころとなる仏さまにご報告し、仏さまのみ教えをいただくご縁として、ご家族そろってお参りいたしましょう。

「真宗儀礼百華第三巻」より

昔は栄養状態や医療、環境状態が今ほどには整っておらず、子どもの死亡率が非常に高かったことから、子どものいのちは消えやすく移ろいやすいものとして、そのいのちの無事な成長の節目となる三歳から

七歳にかけて宗教儀礼がつとめられたことが、いまの七五三の行事へとつながっているようです。



寺 築地本願寺

めぐみの参拝式

お子さまのご成長記念にご家族で寺に参拝してみたい方が、いつもと違った喜びが見つかるかもしれません。

2019(令和元)年11月23日(土)
12:30～14:00

日程	12:30 受付 ご家族での記念撮影
	13:30 勤行「らいはいのうた」 参拝者焼香
	13:50 法話(仏さまのおはなし)
	14:00 閉会

会場 築地本願寺「本堂」 東京都中央区3-15-1

募集人数 50名(同姓家族を除く)

対象 7歳程度までの幼少年

服装 特に指定はございません。記念撮影では靴・履き物を脱いで畳の上にあがりますので、脱ぎ履きしやすいものをすすめします。

記念品 念珠や記念家族写真、お子さま記念品をプレゼント!

参拝料 ¥5,000.-以上
当日受付にて、ご進納ください。

特典 お申し込みいただきました方は、「築地本願寺倶楽部」会員に登録され、様々な特典やサービスが受けられます。詳細を裏面に記載しておりますので、ぜひご利用ください。



申込方法

築地本願寺HPの申込フォームよりお申し込みください。



<https://tsukijihongwanji.jp/news/1127/>

ご不明な点は、築地本願寺コンタクトセンターまでお問い合わせください。

お問合せ 築地本願寺コンタクトセンター
TEL 0120-792-048

寺とプロジェクト

「寺と」プロジェクトとは、築地本願寺が、お子さまの人生や暮らしに寄り添う新たな取り組み、お寺さまの役割を今の時代に合ったカタチで、より多くの人々の心をおもひにかけます。

七五三の歴史

現在の七五三では、三歳の男女児、五歳の男児、七歳の女兒に晴着を着せて参詣する行事が、十一月十五日に行われています。これは、都市部の習慣として発展したようですが、地方でも七五三とは呼ばなかっただけで、三歳から七歳にかけての行事は古くから行われていたようです。十一月十五日とされるのは、この時期がちょうど収穫が終えられる時期であることからです。春や秋などの農耕カレンダーや太陽の動きにあわせて重要な行事が組まれることは、多くの宗教に見られる現象です。それだけ、宗教が人々の生活の根底に息づいていたことの証左でしょう。

中世では、公家の間で二歳または三歳で、男児がはじめて袴をつける「袴着」、武家の間では三歳で、髪をのばし頭に綿を白い苧でくくる「髪置き」が行われていました。中世末になると、男女児とも五歳で「紐とき」「帯なおし」と呼ばれる、つけ紐をとって小袖を着せ、帯を締めさせる儀式が行われました。それらが江戸時代には、七五三と呼ばれる今日の行事の原型

へと徐々に展開していきました。

三歳は、子どものいのちが後へと生きながらえていくヤマと考えられていたようです。その子の生まれ持ったいのちの核あるいは個性ともいえるべきものが、大きなヤマ場を乗り越え、そして、五歳となり、七歳には、幼児期の終わりといういのちの重要な境目を迎えます。現在でも、これらの年齢は、幼児の成長・発達を考える座標となる年齢であり、近代の教育制度においても七歳（満六歳）から初等教育は始まります。また、村落などの地域共同体では、子ども組という組織に参加するという、社会の成員としての地位が周囲から認められ、本人も能動的に社会に関わることをゆるされる年齢でもあります。

＊七五三のポイント＊

結婚などによる独立の時期までの人生儀礼には、ある種の試練がともなうことがよくあります。実際の人生においても、子どもは大人になるための試練を日々乗り越えているわけですが、それらを象徴的に行うわけです。ただ、七五三は幼児期の儀礼ですので、あまり本格的な試練よりも、少しの緊張が経験されるようなものが良いかもしれません。少しの間だけ親や身内から離れ、僧侶と向き合つとか、僧侶から直接に何かを受け取るとか、本人が少しだけ背伸びをし、自分自身に誇りを感じるようなものがよいでしょう。成長した子どもの誇らしげな姿は、親や周りの人たちにとっても大きな喜びとなり、その子の扱いを変化させることでしょう。

また、最近では、七五三に衣装を借りて、どこにもお参りせずに記念写真だけ撮るということも行われているようです。我が子の成長を喜び、少

なくとも記念だけでも残してやりたいという親心でしょう。写真がその人のいのちや人生を象徴するものとなったのは、二十世紀からです。結婚式や歳祝いなど、あらゆる場面で記念写真が撮られます。葬儀での遺影も、出征時の肖像写真がその人の最後の元氣な姿として、そのまま遺影として使われたことから広く普及していったようです。写真は、人の喜びや悲しみなどのさまざまな思いが込められるものです。

七五三でも、記念写真を撮ることはもちろんですが、それを、地域にある写真館と協力すること、一つの方法です。記念写真の予約に写真館を訪れた家族に、寺院で儀礼を受けることもできると紹介してもらえば、新しい縁が結ばれるかもしれません。人生儀礼では、写真館をはじめ、仕出し屋などのさまざまなところとの新しい協力関係を結ぶことができる可能性があります。人の一生と寺院とのかかわりを、また、寺院を中核とした新しい地域のつながりの創出をも視座に、七五三を考えていきましょう。

見た目の変化 ―如来のまなざしに見守られて―

七五三のそれぞれの年齢における儀礼では、先に少しふれたように、「紐落し」「帯結び」「帯祝い」「帯解き」「袴着」などと呼ばれるような、着るものや髪型の変化が見られます。つまり、目にはつきりと見える形で、変化が与えられます。この見た目の変化は非常に重要な要素です。見る目が変わるといいますが、外見が変わることによって、周囲からの見る目や扱いが変わるだけではなく、本人の内面にも大きな変化をもたらします。今でも、小学校や中学校への入学で新しい制服を着る、社会人になってネクタイを締めるといった外見の変化は、本人に自覚と変化を促しますが、古くから人はそうした重要性を知っていたのですね。これは、人生儀礼全般にいえることですが、私たちが人生儀礼をつとめるとき、それは喜びや感謝という内面の表明としてだけではなく、儀礼というまさしく目に見え耳に聞こえる行為のなかで、外面的に変化がはつきりと表現されることを心がける必要があります。人は不思議

議なもので、気持ちや心といった内面さえしつかりとしていればよいと考えがちなのですが、外面的な要素は内面に大きな影響を与えるものです。

さて、変わるのは本人だけではなく、親をはじめとして周囲も変わることになりましたが、今でも家や地域によっては親類や近所に千歳飴を配り、祝膳を囲むということが営まれます。これも、目に見える形で行いであり、家族や地域がその子の成長を喜び、見る目を変えることが促されます。また、このことによって家族や地域のつながりが強められるというはたらきもあります。寺院でつとめられるときには、世話方や婦人会、門信徒の方々が出席すれば、その子と家族にとっては、成長を喜び、変化を見まもる多くの目に恵まれることになり、また、その方々どうしのつながりも強まることになります。もちろん、それらのことすべてが、その子の成長を見守る阿弥陀如来のまなざしのもとに儀礼としてつとめられることによって、単なる人間関係上の出来事ではない大きな意義を持つことになります。

七五三表白の文例

敬つて 阿弥陀如来の尊前に白^{もつ}して言^{もつ}さく

本日ここに 法名釋○○○ 俗名○○○○○ ○歳とな

り

七五三（十三参り）の祝いを迎えるにあたり

恭^{うやうや}しく○○○寺本堂を莊嚴し 經典を誦誦して仏縁に

遇いまみえる

夫^それ惟^{おも}みれば

無始よりこのかた生死輪転の中にありながら

偶々^{たまたま}享^{がた}け難^{にんじん}き人身^うを享^うけ 無常迅速の^{にんが}人界^いにあつて

このたび○歳となられたことは真に目^め出^でたく

有縁の者、喜びもひとしおなり

顧^{かえり}みるに 誕生より今日まで

日夜に我が子を包む 親の慈愛のまなざしあり

然れば親の子を思うが如く

共に合掌し念仏申す我等を思う

大いなる弥陀の慈悲のまなざしあり

希^{こいねが}はくは 今日^この祝いを縁とし

光寿無量の阿弥陀如来

大悲もの倦^うきことなく常に我等を照らし給^{たま}うことを

喜ぶ生涯を送られんことを

敬つて申す

お参りする子どもにもわかりやすい表白

天人ともに仰ぎ見る 阿弥陀さまに申しあげます

本日ここに 法名釋○○○ 俗名○○○○○（君・さん・

ちゃん）○歳となり

○○○寺本堂にお参りし 七五三のお祝いをいたします

思い返してみますと

私たちはたくさん^{いのち}のおかげで

人として生まれてくる事が出来ました

そして今日 ○○○○（君・さん・ちゃん）が○歳
となり

南無阿弥陀仏と手を合わせてお念仏することが出来
るのも

またたくさんのいのちのおかげです

なかでもお父さんとお母さんは

いつでも厳しく そして優しく包んでくださいます

今 目の前の阿弥陀さまも同じように

私たちを大きな慈悲という心で包んでくださいます

願わくは ○○○○（君・さん・ちゃん）が

今日のこのお参りを機縁として

生かされているいのちを喜ぶことが出来る人となり

ほとけの子としてお念仏を申しながら

人生を歩んでゆくことを

阿弥陀さま これからもずっと見守ってくださいいま

すよう

謹んで申しあげます

勤行に用いる和讃

光雲無碍如虚空

一切の有碍にさはりなし

光沢かふらぬものぞなき

難思議を歸命せよ

（六）

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繋ものぞこりぬ

畢竟依を歸命せよ

（七）

南無阿弥陀仏をとなふれば

十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して

よろこびまもりたまふなり（一一〇）

3. 入学式・卒業式

合掌の心を伝える

入学式は、人生の大きな節目の儀式であり、学業を修めるにあたっての大切な開始の式典です。この入学式を機縁として、ぜひともお寺での報告参拝を推奨していただきたいと思います。

入学式は学業を始める式典ですので、まず学業の意義について考えてみます。人間はなぜ、学業を修めるのでしょうか。それは基本的には、生きていくためです。私たちが生きていくためには、多くの知識を必要とします。だから学業を修めるといってもよいでしょう。しかし、学校の教科書に書いてある知識だけでは、人生をよりよく生きることではできません。私たちの人生は、たいへん複雑な人間関係の中で成り立っています。そこで苦勞が絶えず、愚かな考えが生まれ、争い事が起き、ますます苦悩が深まるのです。その根本にあるのは、人間の自己中心的な考えです。

例えば、学校では「合掌の心」は教えてくれません。現代は家庭でも「合掌する」ことが消えてきたといえます。合掌が消えていくことは、社会的に大きな問題があります。なぜなら「合掌する」ということは、自分を見つめ、他者への思いを巡らす、あるいは感謝の気持ちを表す行為だからです。つまり、合掌が消えるということとは、自己中心的な考えが深まり、他人への思いが至らず、感謝の心が薄れるということになるのです。そして、このことが現代社会の大きな問題を引き起こす一つの要素になっていくと考えられます。ここに、入学式を機縁としてお寺に報告の参拝をすることの大切さがあるのです。

入学記念の報告参拝を勧めるにあたり、合掌の大切さを述べました。この合掌には、必ず頭を下げるという行為が続きます。仏さまの前で合掌し、その姿勢のまま礼拝をするのです。

人間は長い歴史の中で、人間を超えた大いなるものに頭を下げるという行為をしてきました。そこには自分の望みや欲求をかなえようと、大いなるものにすがってお願いをするという意味もあつたでしょう。しかし、



人間が大いなるものに頭を下げるという行為をしてきたのは、決して自分の望みや欲求をかなえるためだけではなかったはずです。人間の愚かな心や行為によって争いが起こり、それによって苦しみや悲しみが人々の心を埋め尽くした時、愚かな人間を超えた仏さまに頭を下げ、その大いなる慈悲の心を求めていったに違いありません。それは、愚かな人間のありさまを見つめ直すことでもあったでしょう。

合掌が消えていくということは、大いなるものに頭を下げ、自分自身のありさまを見つめ直すことの意義を感じなくなってきたということでもあります。

昨今の身近に起きるさまざまな事件をはじめ、地球環境や生命倫理などの問題に現れているように、人間の自己中心的考え方が現代の大きな問題となつていきます。私たちが自分のありさまを見つめ直す意義は大きいのです。

＊入学報告参拝のポイント＊

入学式は、ほとんどの学校で四月上旬に行われます。お寺での入学報告参拝も、入学式の時期に合わせて行います。しかし、入学式後に学校が始まると、親子共々なにかと多忙になってくるので、できれば三月の春休みの時期に行う方がいいと思われます。春の彼岸会に合わせて募集すれば、お寺の行事に触れるきっかけにもなるでしょう。早くに入学先が決定している場合は、時期を早めてもいいでしょう。

入学式は桜の季節と重なるので、華やかな雰囲気となるように心がけたいものです。合同での報告参拝の場合は、焼香だけでなく献華・献灯を取り入れても華やかさが増します。

記念品については、お参りで使用する念珠や式章、聖典などを贈り、これからお寺やお仏壇でお参りする時の作法や、一緒におつとめをする習慣の大切さを伝えましょう。

愚かになって卒業？

入学式といえば、本願寺の僧侶を養成する専門学校である中央仏教学院の院長だった白川晴顕先生の入学式での挨拶が記憶に残っています。

白川先生は、「一般の学校では、その学校に入学してさまざまな知識を修得し、卒業する時は入学した時よりも賢くなって卒業していきます。でも、親鸞聖人の教えを学ぶ当学院の場合は、入学した時よりは愚かになって卒業していくということが、本来の卒業ではないかと思っています」と話されたのです。

聖人の教えを学ぶということは、結局、自分の愚かさを知らされるということでもあります。このことを白川先生はこれから仏教を学ぶ人たちに伝えられたのです。賢くなったということを誇り、そのような自分自身をあてにするような心には、やがて自己中心的な考えが満ちてきます。そして、阿弥陀さまの大きなお慈悲の心を受けとめる、そして阿弥陀さまにすべてをまかせるという心は生じてきません。

仏教は「鏡」にたとえられます。「鏡を見る」とい

う場合、「この鏡は丸い形をしている」「この鏡はきれいに磨かれている」などと、鏡の外観を見る人はいないでしょう。「鏡を見る」ということは、「鏡に写った自分の姿を見る」ということのはずです。仏教は聞けば聞くほど、自分の姿が明らかになる。そこで、自分の生きる意味や方向が定まってくるのです。

学業の始まりにあたって、ぜひとも仏教との出遇いの場をつくっていただきたいと思います。

たくさんつながりに感謝

「卒業」という言葉には、大きく分けると二つの意味があります。一つ目は「学校の全課程を学び終えること」。二つ目は「ある段階や時期を通り過ぎること」です。

卒業式は、学校の全課程を学び終えたことを祝う式典ですが、それは新たな出発を祝う式典でもあります。人生にとって卒業式は、大切な節目の式典であるといえます。それを単なる通過点として過ぎるのはさみしいものがあります。

卒業を機にこれまでの学校生活を振り返ると、先生をはじめ、両親やたくさんの方々をサポートがあったと思います。また、友達とのつながりも学校生活の大きな支えとなったことでしょう。卒業式にあたっては、そうした方々への感謝の思いを持つことを忘れてはいけません。

そうしたお世話になった人や友達一人ひとりに感謝の言葉を述べるのは難しいことです。しかし、卒業を機縁としてお寺にお参りすることは、そうしたお世話になったたくさんの人に思いを巡らし、それぞれのつながりに感謝していくことです。

ある門徒さんのお宅にお参りに行くと、お仏壇の前に娘さんの大学の卒業証書が飾られていました。その娘さんは、卒業式から帰ると、まっ先にお仏壇に卒業証書を飾り、手を合わせていたそうです。

卒業ということだけを見ると、卒業証書を授与された時点で完了しているのですが、たくさんの方のおかげで無事に卒業できたこと、ご先祖や仏さまに見守られながらの人生だったことに思いを巡らし、仏さまにそのことを報告し、感謝の思いを表す。これが仏教徒

としての本当の卒業式だと思います。

※卒業報告参拝のポイント※

入学式との大きな違いは、卒業式には卒業証書の授与があることです。その卒業報告ですから、お寺で行う場合は卒業証書を持参してもらい、内陣に飾ります。

学業を修め無事に卒業できた喜びを報告し、これまでの学業への精進を讃えることも大切ですが、先にも述べたように、先生や友人など、さまざまなつながりに感謝することが重要となってきます。式典をはじめめる前にそつした趣旨を伝えることも大切です。

卒業は新たな出発

毎年、卒業式シーズンになると、京都の本願寺にはたくさんの方の宗門関係学校の生徒が卒業報告参拝に訪れ



ます。その中、相愛高等学校の生徒は、そのほとんどが宗門関係学校で学んだことの集大成として帰敬式を受式しています。

照明が落とされ薄暗くなった御堂で、生徒たちは緊張の面持ちで帰敬式に臨みます。そして、式が終了すると、これまでの緊張が急に解け、ずっと我慢していた正座の痛みからも解放され、思わず「ハ〜ッ」と声を出して姿勢を崩します。この様子がニュース番組でよく取り上げられるので、ご存知の方も多いと思います。

帰敬式を受けた生徒は、自分の法名を見つめながら「本願寺の学校を卒業したよい記念になります」「新しい自分になれた気分です」「これで新たな気持ちでスタートできます」などと、法名をいただき、さまざまな思いを胸にそれぞれの新しい道に進んでいきます。

「卒業」といえば、「最後」「終わり」というようなイメージが強いかもしれませんが。しかし、卒業には「新たな出発」という意味もあります。仏教は生涯をかけて聞いていくものです。卒業という新たなスタート地点に、仏教儀礼があることの意義は大きいと思います。

仏さまの温かさに出会う

以前、「本願寺新報」で、卒業式を間近に控えた中学三年生をお寺に集め、仏教婦人会の方々が食事を開かれているという記事がありました。義務教育を終え、新たな世界に飛び立っていく子どもたちに、地元のお寺からエールを送ろうと開かれている行事とこのことでした。

中学三年生といえば、思春期の真っただ中。そうした時期に、義務教育を終えていく子どもたち。将来への希望やこれまで以上に自分に責任を持って生きていかなければならないことへの不安、小学校からずっと一緒だった地元の友達と別れることへのさみしさ、将来を決めるような進路選択をしなければならないこと

への戸惑いなど、さまざまな思いを抱いている子どもたちです。

そんな子どもたちを励まそうと、いつも見守ってきた地元のおばちゃんたちが腕によりをかけて作った料理を振る舞う姿からは、とても温かい雰囲気伝わってきました。

人生の大きな節目の卒業式。希望や不安、戸惑いなど、さまざまな思いの中で、仏さまの温かいまなざしにであつてもらうということも、お寺での卒業報告参拝の意義ではないでしょうか。

入学式・卒業式表白の文例

敬つて西方願王阿弥陀如来 人界（にんがい）の教主釋迦如来
並びに十方三世一切の三宝に白（もう）して言（もつ）さく

本日ここに恭しく尊前を莊嚴し
薫香（くんかう）を捧げ懇ろ（ねんろ）に妙典を誦誦して

法名釋○○、俗名○○○○の（○学校入学・○学校

卒業）を奉告す

夫れ（そ）惟（おも）みれば

三界は無常にして流転窮（きわ）りなし

なにもものもみな 久遠（くおん）より生滅変化し

留まることなし

古人 行く川の流れは絶えずして

しかも元の水にあらず

と詠むはこの意なり

また さるべき業縁のもよおせば、

いかなるふるまいもすべし

と宗祖仰せのとおり この身は因縁生起せしもの

蒙（こうむ）る縁によりて 変化するのみなり

さればこのたび 諸事相整い

如来の御前（おんまえ）に念仏申し（入学・卒業）を奉告すること

有難き仏縁といただくなり

今日より 一層の聴聞に励み

弥陀召喚の念仏とともに人生を歩まんことを

敬つて白（もう）す

子どもにもわかりやすい入学式表白の文例

謹んで阿弥陀さまに申しあげます

本日ここに 蠟燭を灯し 香と花をお供えして

法名釋○○ 俗名○○○○の○学校入学の喜びをこ

奉告いたします

よくよく考えてみますと

ほとけさまは 世界は常に移り変わっていて

いつまでも同じものは一つもない

と教えてくださいます

それは 例えば川の水のように絶対に留まらず

同じように見えても昨日と同じ姿ではありません

私たち自身もまた

毎日毎日泣いたり 笑ったり 楽しんだり

悲しんだりしながら大きくなってゆきます

そしてこのたび 多くの方々のお世話と

たくさんの方のいのちに育まれる中で無事○○学校入学

のご縁が整い

阿弥陀さまにご挨拶出来ることは

大きな喜びであります

これからは今日という日は二度とないことを忘れず

毎日勉強や遊びを一生懸命にし

朝夕には阿弥陀さまに手を合わせ

おかげさまとお礼の言える○学生となることを

敬って申しあげます

勤行に用いる和讃

解脱の光輪きはもなし

光触かふるものはみな

有無をはなるとのべたまふ

平等覺に歸命せよ

(五)

七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方衆生きはもなし

講堂道場礼すべし

(三五)

善知識にあふことも
 おしふることもまたかたし
 よくきくこともかたければ
 信ずることもなほかたし (六九)

儀礼トピックス

以前、熊本教区仏教青年連盟が、人生の変化や節目にお寺にお参りしてもらおうと「仏式卒業式」という行事を企画していました。学校の卒業式と違う所は、「〇〇卒業」の「〇〇」に入る言葉は何でもいいという事です。

仕事を退職した人は「仕事卒業」、結婚が決まった人は「独身卒業」という感じで、卒業する項目は何でもいいのです。参加者一人ひとりが何からの卒業なのか、その理由やこれからの決意を述べた後、卒業証書を受け取るというものでした。

卒業には「学校の全課程を終えること」「ある段階や期間を過ぎること」の二つの意味があります。学校を卒業するのはおめでたいことですが、この仏式卒業式ならば、子どもが昔のおもちゃに関心がなくなった時は「おもちゃ卒業式」や「ゲーム卒業式」、大人がたばこをやめた時は「たばこ卒業式」など、いろいろな変化、節目にお寺に行くことができると思いました。

また、この方法ならば、よい段階に進んだ時だけでなく、悪い出来事でもいいということになります。たとえば離婚に際して「結婚生活卒業式」とか。これならよくない出来事も、前向きに受けとめられるかも知れません。そして、これまでの自分の行動言動を反省する時、同じ失敗を繰り返さないという決意も芽生えてくるのではないでしょうか。

良いことも悪いことも受け入れられるお寺ならではの卒業式だと思います。

4. 成人式

古くからある成人の儀式

成人式は、両親や周りの大人たちに保護されてきた子ども時代を終え、自立し、大人の社会へ仲間入りすることを自覚する、人生の中でも重要な節目の儀式です。「冠婚葬祭」の「冠」の字は成人式を表していることから、「成人になる」ということが、古くからどれだけ重要視されていたのかが分かります。

日本には古くから成人を祝う通過儀礼がありました。男子では「元服（げんぷく）」、女子では「裳着（もぎ）」や「髪上げ」といったものです。

「元服」は、奈良時代から行われてきた男子の成人になる儀式で、数え年で十一歳から十六歳ごろの男子が、髪を大人の髪型に結い、冠または烏帽子（えぼし）をつけ、服装を改め成人したことを周囲に示しました。また、髪型や服装だけでなく、名前も幼名から改名されました。

女子の場合は、平安時代から行われていた「裳」という腰から下にまとう衣服を身に着ける「裳着」、髪を結い上げる「髪上げ」を成人になる儀式としました。こちらも、数え年で十一歳から十六歳ごろに行われていました。

このように、古来の日本では、子どもから成人になる「元服」や「裳着」といった儀式は、成人となった自覚を促す重要な儀式として認識されていたのです。

現代における成人式

このように、古来の成人の儀礼は、二十歳よりも前に行われていましたが、今日行われている成人式のように二十歳で行われるようになったのは、第二次世界大戦後のことです。新成人が一堂に会して行う成人式の発祥は、一九四六（昭和二十一年）年に埼玉県蕨市で開催された「青年祭」だといわれています。その後、全国に広まり、日本政府は「大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」の趣旨のもと、一九四八（昭和二十三年）年に毎年一月

十五日を「成人の日」と制定されました。「成人の日」を一月十五日に定めたのは、古来、元服の儀を新年最初の満月の日に行う風習があり、それに由来しているためです。その後、祝日法改正により、「成人の日」は一月の第二月曜日と定められました。

最近では、成人の二分の一の年齢である十歳を迎えたことを記念して行われる「二分の一成人式」「半成人式」という行事が、授業の一環として全国の小学校で広まっているようです。これは、十歳になる小学校四年生の時に行われ、十歳という節目を迎えるにあたり、今までのことを振り返り、周りに支えられながら生活していることを再認識し、感謝しつつ、成人するまでの次の十年に向けて意を新たにするという行事です。式では、感謝の言葉、これからの目標などを発表します。今では、この「二分の一成人式」や「半成人式」が、一般寺院や別院などで行われている場合があります。

また、一部の中学校では中学二年生または中学三年生になると、学校行事として「立志式（りっししき）」を行っています。これも目的や行事の意義としては「二

分の一成人式」と同様ですが、古来の「元服」を行っていた年齢が主に十五歳前後であったことから、そのことにちなんで行われているようです。

さらに、三十歳で行う「三十路式」や、二十歳の倍に当たる四十歳に行う「W成人式」など、成人式をもととして今日ではさまざまな式が全国で広まっています。

※ お寺での成人式のポイント ※

近年、各地方公共団体で行われている成人式において、さまざまな問題行動の報道を目にすることが多くなりました。このことから、古くからある成人となった自覚を促す重要な儀式としての認識は低下しているように思われます。それでは、お寺での成人式とは、どのようなものなのでしょう。

現在、成人式は、主に地方公共団体が主催となつて行われていますが、本山においても毎年行われています。また一般寺院でも行われていますが、

そうした寺院で行われている仏前成人式で問題行動があったということは聞いたことがありません。寺院という厳かな宗教空間で行われる成人式は、和やかな中にも荘厳で厳粛な独特の雰囲気があります。多くの新成人にとって非日常の聖なる空間ともいえる場所で行われる成人式ですから、自然と成人を迎えた自覚を促し、決意をあらたにする機縁となる重要な儀式であるとの認識も出てくるのだと思います。

阿弥陀さまの御前で手を合わせ、一人の成人として社会に旅立つにあたり、これまで育てにあずかった方々への感謝の気持ちを表す。そして、浄土真宗のみ教えを聞いて、本当に頼りとするものがない不安定な生活の中で、確かな依りどころをもった人生を歩んでいくことを報告する。そうした寺院での仏前成人式を意義のある人生の新たな出発への儀式として大切にいたしましょう。

成人式の参加者（写真上）と本人が20年前の親に抱かれて初参式にお参りした時の足形（写真下）



成人式表白の文例

敬つて大慈大悲の阿弥陀如来の御前に
白して言さく

ここに本日 恭しく尊前を荘厳し、
懇ろに聖教を読誦して

法名釋○○ 俗名○○○○の成人式を執り行なう

夫れ 人界は無常の境涯にして

はかなきこと 老少不定のさかいなり

その中であつて二十歳を迎えることは

有難きことにて 親族有縁の喜びもひとしおなり

加えて遇い難き佛法に遇い

仏の御前に成人奉告の式を致すこと

真に尊く 有難き宿縁なり

また世間にては 齢二十をもつて大人とす

大人とは 己が責を己が負うことなり



されば 成人式とは育て賜る御親への感謝
また己が責務を全うする決意なり
今日よりは 身口意の三業に大人を自覚し
社会の安寧を願ひ
阿弥陀如来の大慈大悲の誓願を弘く伝えて
以て広大の恩徳に謝せんことを
敬つて白す

勤行に用いる和讃

たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり (三一)

釈迦弥陀は慈悲の父母

種種に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめたまひけり (一九二)

如来の作願をたづぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり (二七五)

成人式を機縁とし仏法に出遇う

昨今、若者の宗教離れという言葉をよく耳にします。

特に、仏教の話は年配の方が聞くものだと思われる方が多いように思います。「もう少し歳をとったら、仏教の話を聞かせてもらいます」「仕事が定年になり、時間ができたらお寺参りをさせていただきます」と言われる方もおられます。

しかし、それでは遅いと考えるのが浄土真宗です。

『蓮如上人御一代記聞書』には、「仏法は、若いうちに心がけて聞きなさい。年をとると、歩いて法座に行くことも思い通りにならず、法話を聞いていても眠くなってしまいうものである。だから、若いうちに心がけて聞きなさい」とあります。

成人式を迎えるということは、これから人生のさまざまな問題に自分自身の責任で向かい合い、社会的責任を果たす人になるということです。そこで、「これから人生をどう生きようか」「将来はどうなるのだろうか」と思い悩むのも、これからの人生を作り上げていこうという力に恵まれている若い時だからこそなの

です。蓮如上人は、こんなときこそ、自分の本当のよ
りどころとなる仏法が必要だといわれるのです。

仏法を聞くということは、我が身を深くかえりみて、
本当に大事なことに気づかされるということです。仏
法を聞き、我が身をかえるみると、これまで自分勝手
な生き方しかしていなかったことに気づかされます。
私たちは、阿弥陀さまの光に照らされることによって
はじめて、自分自身の姿が知らされるのです。

自分勝手な生き方をするだけでは新たな問題が発生
し、社会的責任を果たすとはいえません。自分の周り
や世界を見渡すと、文化や生活環境の違いなどによっ
て、いろいろな立場の人がいます。そんなことに気づ
いていく繊細さを持つことも必要であり、自分では見
えていなかった世界があったということに気づく謙虚
さを知ること、成人として大切なことです。仏法を
通してそうしたことに気づき、自分だけでなく、他の
人もすべてが幸せになるように願い行動するようにな
る。このことが社会的責任を果たすということにつな
がるのだと思います。

本山ならびに一般寺院で行われる「仏前成人式」へ

の参拝を奨励し、仏法に出遇い、力強く人生を歩むこ
との大切さを伝えていきたいものです。

5. 結婚式

この世に生を受け、たくさんの人々の中から、妻、夫と呼び合える関係となることは、本当に不思議です。結婚という人生の新しい門出を、仏前で誓い合うことは、大変に意味深いのではないでしょうか。

以前、お寺でご門徒の結婚式の司婚を務めさせていただきました。その時に「どうしてお寺で結婚式を考えたのですか」と尋ねると、「せっかく式を挙げるのなら、ご縁のある場所で、ご縁のある人に司婚者となっていたかったです」と話しておられました。

結婚されるお二人にとって結婚式だけの司婚者の前に、誓いの言葉を交わすよりも、親交のある司婚者によって、特別な時を取り持つてもらうことに意味を見出されたようです。このように慶び事にも家族の悲しい出来事にも、お寺という同じ場所に集い過ごすことは、ご家族の心の依りどころとなるのではないのでしょうか。

※結婚式のポイント※

浄土真宗で行われる結婚式では、念珠の授与があるのが特徴です。式次第には指輪の交換や、祝盃を酌み交わす等を取り入れることもできます。また、サンプルの誓いの言葉もアレンジするなど、新郎新婦との打ち合わせをしっかりと行い、世界に一つだけの式を作り上げていくことで、お互いを敬う気持ちがより伝わる思い出深い結婚式となることでしょう。

次第は、『法式規範』に記載されている勤行もありますが、式の時間や、参列者と一緒におつとめするのかなど、新郎新婦の希望に沿ってアレンジすればよいでしょう。

津村別院では、「至心礼」や「頌讃」を用いて挙行されます。また、雅楽を取り入れた厳かな式は、参列者にとって強く印象に残るようです。

寺院以外の場所（ホテルなど）で仏前結婚式を執り行う場合、火気（ろうそく、焼香など）の取

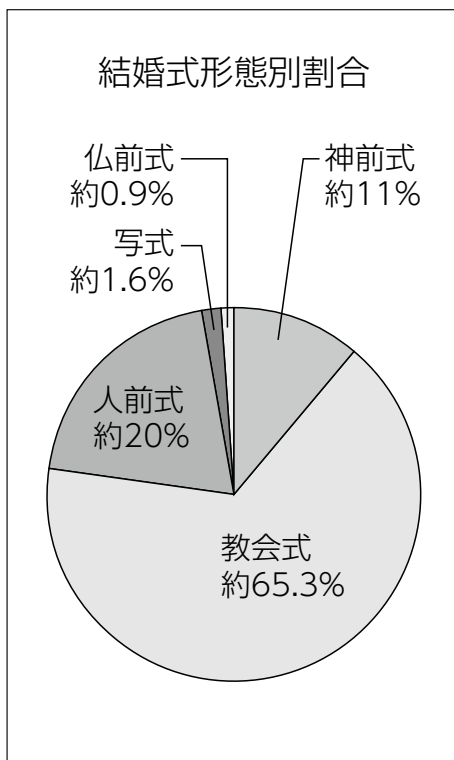
現在の結婚式データ

では、現在、結婚式はどのように行われているのでしょうか。リクルートブライダル総研の「結婚総合意識調査2018」では、結婚される85・6%の人が何がしかの形で結婚を機としたセレモニーをしています。一方で、経済産業省による「年間形態別挙式取扱件数」の区分では、残念ながら仏前式は「その他」に

参考として



扱いが制限されることもあります。その際には、献華を試みるのもいいかもしれません。



分類されるほど今では珍しい形態となっています。さらに、一部のデータですが、結婚式における形態の割合をご覧ください。今では、式をせず写真撮影のみの新しい形態まであります。表から分かりますように、圧倒的に教会式が多く、反対に仏前式はごくわずかです。

その理由として挙げられるのが次の通りです。

- ・ウェディングドレスが着たかった
- ・写真等を見返しても様になる
- ・オシャレな感じがする
- ・ランドマーク的ところで式をあげたい
- ・無宗教だから

積極的な発信

このような仏前式が選択されない状況を少しでも変えるための参考になればと、真宗大谷派真宗会館が掲載しているホームページのQ & Aの一部を次に引用掲載しました。

Q. 仏前結婚式を挙げるのはどんな人

A. 自分のルーツ、先祖を大切にしたい

自分らしい式がしたい

Q. お寺でないと結婚式はできないの？

A. いいえ、仏前結婚式はどこでも行うことができます。ご本尊を安置することが一つの条件としてありますが、これまででも、ご自宅やレストラン、ゲストハウス、海外の式場など、さまざまな場所で行われています。

Q. ウエディングドレスはやっぱりNG？

A. 白無垢や色打掛け、本振袖などの和装を選ばれる方が多いですが、ご希望にあわせてウエディングドレスなどの洋装もちろん着ていただけます。

ます。

結婚式は人生の節目に行う大切なセレモニー。

ご自分のお気に入りの衣装に身を包むことができます。

このように、仏前式での素朴な疑問にもシンプルかつ丁寧に答えが書いてあり、ホームページ内には、他に式当日の一連の流れをわかりやすく写真付きでまとめてあります。また準備するものなどについても細やかに書かれていて安心して当日を迎えられるようになっていきます。一般の方は、周りに仏前での式に臨まれた方がいないと、見聞きする機会がないため、どんなものかが分かりません。分からないのでハードルが高くと感じて選択する人も自然と少なくなります。お葬式はいくつもセミナーがあるのですが、仏前結婚式のセミナーというのはほとんど聞いたことがありません。これも仏前結婚式が知られていない原因の一つだと思います。今後はお葬式同様にセミナーやホームページを通して結婚式や他の法要儀式もお寺が行っていることをわかりやすく積極的に発信していくべきだ

と感じます。

浄土真宗の仏前結婚式は、夫婦となるご二人の大切な思いを如来さまの前で誓う儀式です。ご縁のある寺院、僧侶が新郎・新婦やご親族に丁寧な寄り添うことで仏前式にして良かったと思っていただけるでしょう。

司婚 誓いの言葉(例)

新郎 ○○ ○○ さん

新婦 ○○ ○○ さん

の婚儀を仏前に挙げるにあたり
二人の誓いを求めます

新郎 ○○ ○○ さん

まごころをもって妻を敬愛し
よく夫としてのつとめをはたし
共に報謝のまことにいそしんで
人生を正しく生きることを誓いますか

(新郎) 誓います (またはうなづく)

新郎新婦 誓いの言葉(例)

新婦 ○○ ○○ さん

まごころをもって夫を敬愛し
よく妻としてのつとめをはたし
共に報謝のまことにいそしんで
人生を正しく生きることを誓いますか

(新婦) 誓います (またはうなづく)

本日

○○寺の仏前におきまして

わたくしたちの結婚式をあげますことは
まことに有難いことであります

これひとえに 両親をはじめ

皆さま方のお蔭であると心から感謝いたします

この上はみ教えにしたがい

夫婦 仲むつまじく

互いに いたわり 助けあつて

内にあつては うるわしい家庭をつくり

外にあっては 世のため 人のために尽くす
よき社会人となるよう 努力することを誓い
ます

新郎 ○○ 印
新婦 ○○ 印

○○ 年 ○ 月 ○ 日
司婚者 ○○ 印
立会人 (仲人) ○○ 印
○○ 印

結婚式表白の文例

敬つて西方願王阿弥陀如来 人界の教主釋迦如来
並びに十方三世一切の三宝に白して言さく
本日ここに恭しく○○寺本堂を莊嚴し
懇ろに妙典を誦誦して

両家親族縁者列席のもと

新郎○○○○(法名釋○○)

新婦○○○○(法名釋○○)

厳かに婚姻の儀を挙行す

夫れ惟みれば

曠劫よりこのかた 常没流転して

今人界にあること 甚だ稀なり

加えてあまたの有情より選り選ばれて異体同心の

契りを結び夫婦となること

まことに深い宿縁の催しによるところなり

しかしながら世尊 娑婆は無常の境涯と説きたまう

樂は樂として続かず 苦は苦としてまた続かず

希はくは 今日より互いに敬愛を忘れず

夫婦相い和し相い扶けて苦樂を共にし

和顔愛語絶えることなく

念仏の大道を歩まれんことを

伏して乞う

三宝 哀愍摂護したまへ

勤行に用いる和讃

罪障功德の体となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし（一五八）

尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれば

智慧のうしほに一味なり（一六〇）

安楽仏国にいたるには

無上宝珠の名号と

眞実信心ひとつにて

無別道故とときたまふ（一六三）

同性婚

浄土真宗本願寺派では、二〇一六（平成二十八）年十月に築地本願寺で「パートナーシップ仏前奉告式」という名称の儀式が行われました。前月には『宗報』に記事が掲載され

性的少数者の「儀礼としての結婚式」に関して、性的少数者の「結婚」「結婚式」は性自認や性指向で苦悩する人びとの切実な課題の一つである。

我が宗門が、苦悩する人びと、少数弱者に寄り添うことを使命とするのであれば、「結婚」という法的な面で解決されていない現状であっても、例えば、先に見た渋谷区の「パートナーシップ証明」などにも倣って、「パートナーシップ仏前奉告式」を執り行うことに、教理的には問題はないであろう。と結ばれています。

この『宗報』にもある「性的少数者」とは、何らかの意味で「性」のあり方が多数派の人々と異なるあり方の人々をいいます。多数派である異性愛（異性に対して、すなわち、男性は女性に、女性は男性に恋愛感

情を寄せる性的指向を持つ）ではない性的指向を持つ人、また、出生時の身体的性別に対応しない性自認を持つ人をいいます。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの、それぞれの頭文字をとってLGBTIと略されることもあり、また、指向が明確ではないクエスチョニング、多様で複雑性のある性のあり方を表すクイアの頭文字を加えてLGBTQとも表されます。LGBTIはそれぞれに別個の概念ですが、共通して、少数者として社会から差別や排除を含めた不利益を受け、また、多数派とは異なるあり方に自ら苦悩する実際があります。二〇一五年には、国連が「レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの人々に対しての暴力と差別を終わらせる」と題した声明で、「(LGBTI)の人々は、性別、人種、民族、年齢、宗教、貧困、移住、障害、健康状態などの要素に基づいた様々な形の差別を含めた、幅広い差別や排除に直面している」と指摘しています。日本でも法的拘束力のある制度としての解決はまだですが、検討に向けての調査、研究が進められています。

さて、私たち念仏者の生き方は、「すべての人」が「等しく」「ありのままに」救われるという教えに基づきます。しかしながら、その平等性や人間の唯一無二性の原理があることを以って、すべてが解決しているわけではありません。現実の社会には少数者の苦悩があります。私たちが少数者と向きあうとき、これまで当然のごとくに「すべての人」と言ってきた、その「当たり前」の内実が問い直されていなければなりません。「性的少数者」は、そもそも「当たり前」ではない「特別な人」なのでしょうか。その「特別な人」にも私たちは手を差し伸べるといことなのでしょうか。違うはずです。問い直されているのは、私たち自身の人間の性の捉え方であり、そして、また、忘れてはならないのは、その私たちの社会が少数者に苦悩を与えているという現実です。

また、性の問題は、即座に「家族」の問題へと結びつきます。家族であることで認められているさまざまな権利が、性的少数者のパートナー間では制限されています。そうした制度上の問題と並行して、私たちが家族のあり方を考えなければならない直接の場面には、

例えば、葬儀、年回忌法要や納骨があります。父母がいて子がいるという従来の家族形態や価値観を前提として、私たちは活動してきました。その従来の形態は解体されるべきであるということではありませんが、従来の価値は大切にしながら、その価値の真偽性をしっかりとした客観的知識に基づいて検証し、そして、その価値によって苦悩している現実はないかを常に慎重に見ていかなければなりません。

「同性婚」儀礼を執り行うということは、従来の形態ではない、人と人との新たな家族としての結びつきを、仏の前に奉告することです。寺院という神聖な空間で、大いなる伝統の力の前に関係性を誓うということとは、大きな自覚を促すことであり、また同時に、仏のまなざしに見守られるという深い喜びをもたらすことででしょう。「ありのまま」の姿が認められる、そうした儀礼空間をつくりあげていきたいものです。

【パートナーシップ条例】条例により、証明書を持つ同性カップルに対して、結婚に相当するパートナーとしての配慮を区内の事業者に求めるもの

【少数弱者】少数弱者という表現に関して、性的少数

者の場合に限らず、弱者という単語は社会的弱者という意であり、当該者が弱い本性を持つという意では決してなく、弱い立場へと社会が追いやっているという社会構造上の弱者の意である。その上で、強者・弱者あるいは加害者・被害者という構図の中に、個別に多様な複雑な立場を単純化してほしくないという主張が一方にある。二項対立による分断化をまねく原理的概念ではなく、性的指向と性自認はすべての人に関わる問題であるので、「性的指向と性同一性SOGI (sexual orientation/gender identity)」という包括的な概念を使うことも、このことに関連する。他方で、少数者であることで実際に不利益を被っており、多様性の重視や包括化する捉え方は、現実の弱者性・被害者性を覆い隠すことになるという問題を指摘する主張もある。

法話の参考に

日本に仏教が伝わってから長い間、仏教の出家者は男女が一緒に婚姻生活を送ることを規則として禁じていました。しかしながら親鸞聖人は恵信尼さまを妻と

されました。

では、なぜ親鸞聖人は妻をもたれたのでしょうか。

それは、親鸞聖人の師である法然聖人の「もし、妻を持たなければお念仏できないのであれば、妻を持ちなさい。反対に、妻を持つことでお念仏ができないならば、妻を持つことをやめなさい」という教えに影響を受けておられるからと伝えられています。

この教えに加え、親鸞聖人は若いときに、観音さまが将来自分の妻になってくださる夢を見たとおっしゃられました。そして恵信尼さまと結婚されたとき、この人こそ観音さまの生まれ変わりであると、常に敬い信じられました。そして恵信尼さまも、末娘の覚信尼さまへの手紙のなかに、夫である聖人を観音さまとして夢で見たと書かれていました。親鸞聖人ご夫妻は、お互いを尊敬しあい、信じあうことによって本当の愛情を育まれました。

関連行事として

金婚式

日本でも最近は結婚記念日を祝う人も増えてきました。まだまだ本人たちが発案して祝うことも気恥ずかしいせいか、子どもたちが計画し、親の結婚何周年記念として家族が集うことも多いようです。もちろん、若い世代は記念日慣れをしているので、毎年の結婚記念日には二人だけの特別な日として祝うこともあります。もともとは、ヨーロッパ、とくにイギリスで行われてきた風習で、毎年の結婚記念日に、それまでの苦労をねぎらい合い、また次の一年に向けて絆を深め合い、プレゼントを交換し合うということが行われているようです。この意味では、結婚記念日は、結婚生活におけるそれぞれの成長を祝い願う人生儀礼の要素と同時に、毎年行う暦儀礼としての要素が強くあるものです。イギリスでは、年ごとの結婚記念日に、「木婚式」や「レース婚式」、「銅婚式」、「水晶婚式」などと名称がつけられ、プレゼントも、はじめのころは日常的で

柔らかいものが選ばれ、だんだんと年を重ねるにつれて貴重で硬いものへと変えていくようです。

日本では、「明治二十七年三月六日勅令第二十三号」が定められ、一八九六（明治二十九）年に明治天皇の成婚二十五周年を祝う「大婚二十五周年祝典」が催されました。このことによって、結婚記念日を毎年のものであり、より周年として祝うことが、日本では定着したようです。二十五周年は「銀婚式」、五十周年は「金婚式」です。長年にわたって、喜びや悲しみ、苦しみを共にしてきた、その一つの節目として、あらためてお互いに感謝の念を抱き、その先の人生を願いあう儀礼です。普段から、ありがとうの心を大切にする結婚生活を送っているとしても、こうした節目にあらたまることはとても大切です。ましてや五十周年である金婚式ともなれば、この世での最後の節目となるかもしれせん。願われるのはこの世での二人の人生だけではなく、死が二人を分った後のいのちも意識されることでしょう。不思議としかいえない縁で結びついた二人が、また不思議な縁でこれまで生活を共にし、これからも生かされていく、こうした大きなはた

らきにあらためて気付いていく大切な機会となること
でしょう。



金婚式・銀婚式・その他表白の文例

敬つて西方願王阿弥陀如来 人界の教主釋迦如来

並びに十方三世一切の三宝に白^{もつ}して言^{もつ}さく

本日ここに恭しく尊前を莊嚴し

薫香^{くんこう}を捧げ懇^{ねんこ}ろに妙典を誦誦して

夫○○(法名釋○○) 妻○○(法名釋○○)の

(金婚・銀婚・その他)の式を執り行う

夫^それ顧^{かえり}みれば

二人は(昭和・平成・令和)○○年に

不思議の宿縁を得て夫婦の契りを結び

爾^{じらい}来^{らい} ともに手を取り合い○○年を経^へたり

その道程^{どうてい} 必ずしも平坦ならず

時に悲しみあり、また苦しみあり

しかしながら まさに比翼連理^{ひよくれんり}の如く

勞^{いたわ}り慈しみ 次代を育み 敬愛の心を忘れず

弥陀如来の大慈大悲の光明照護のもと

念仏薫る家庭を築く

その姿は本願念仏の末流に留まるものの

範^{はん}とすべきところなり

この上は互いに感謝を忘れず

寄り添いあつて一層の聴聞を心掛け、

穏やかな日々を過ごされんことを

伏して乞う

三宝 哀愍摂護したまへ

6. 就職・転職・退職式（定年式）

生き方のヒントに

就労によって報酬を受け、生活をしていく。これは私たちにとって当たりまえのことかも知れません。しかし、その就労にまつわる就職、転職、退職などは、人生の大きな転機ともいえます。この人生の転機を迎えられた方々に、ぜひ仏法との出遇いの場をつくっていただきたいと思います。

仕事をするということは、さまざまな苦労や悩みが伴います。すぐに解決できるような悩みならいいですが、自分の力では解決できないような大きな壁に直面した時、一人で悩んでいてもそこから抜け出せない場合があります。

もちろん、僧侶としてそうしたさまざまな悩みを即座に解決しなくてはいけないというわけではありません。しかし、苦労話や愚痴を聞いたり、悩みを打ち明けてもらったりすることで、相手の気持ちが少し楽に

なることがあると思うのです。

仏教には、考え方や生き方のヒントになる教えが詰まっています。生き方を整えたり、人の心を見つめたり、人間関係をよくしたり、小さな仕合せに気付いたりする言葉がたくさんあります。そうした教えに触れる場がお寺なのです。仏教を聞きながら、人間としておたがい穏やかに成長していきたいものです。

また、終身雇用制度が崩壊しつつある中、転職は当たりまえという時代になってきました。転職によって、周囲の環境や人間関係もガラリと変わります。新しい環境への不安や新たな悩みも出てくるかもしれません。転職という人生の転機を迎えた方々にも、お寺から阿弥陀さまと一緒に時間をつくる提案をしていただけたらと思います。

お寺を居場所に

定年退職の後に何をしていいのかわからないという人がおられます。仕事一筋だった人が退職した直後から、抜け殻のようになったという話もよく聞きます。

一方で、退職後はこれまでやれなかったことにチャレンジしよう、スポーツや趣味に時間を費やそうなどと意欲を燃やす人もおられます。

いずれにしてもお寺のことが忘れられているのが現状ではないでしょうか。退職で自分の時間が増えるこの機に、ぜひお寺参りを勧めましょう。

現在、日本人の平均寿命は、厚生労働省の公表によると男性が八十一歳を超え、女性は八十七歳を超えています。ところが近年、平均寿命という言葉とともに、健康寿命ということが注目されてきたのです。

健康寿命とは、人の助けを借りずに普段の生活が一人ででき、健康的な日常が送れる期間で、男性が約七十二歳、女性が約七十四歳ということなのです。つまり、退職の年齢を六十歳とすると、健康的に一人で生活できる期間は、男性ならばあと十二年ほど、六十五歳で退職ならばあと七年ほどということになるのです。

この退職からの健康寿命の期間を長いととるか、短いととるかはそのそれぞれでしょう。しかし、その後のことを考えずに過ごしてしまうと、むなしさや喪失感、



虚脱感が再び襲ってくるということになるのです。

仕事や家庭、趣味の場所などを行ったり来たりしている私たちですが、その場所にいつまでも留まることは不可能です。そんな生死の間で迷っている私たちのために、阿弥陀さまは浄土を建立されました。ここに浄土を持つということは、いつまでも変わらない「居場所」を持つということです。

お寺も私たちの人生の居場所の一つになります。退職を機にお寺が新たな居場所となるように、お寺との関係を深める工夫をしていただければと思います。お寺で退職式（定年式）を行うなど、人生の新しいスタートをお寺で迎えるのもいいかも知れません。

※就職・転職・退職式のポイント※

就職の場合は、卒業報告と併せて法要をつとめることも可能です。転職の場合は、良い条件が整い転職する場合と、やむを得ず転職する場合があるので注意が必要と思われます。いずれにしても

お寺との関係、仏法との出遇いのきっかけとなることが大切です。

退職式（定年式）は数人の合同の場合もあると思われます。これからお寺参りを勧めるにあたって、念珠をはじめ、式章などを記念品にするのもいいでしょう。退職を機に、帰敬式の受式を勧めることも忘れないようにしましょう。



就職に際して印鑑をプレゼントする寺院もある

就職・転職・退職式表白の文例

敬つて西方願王阿弥陀如来 人界にんがいの教主釋迦如来

並びに十方三世一切の三宝に白もつして言もつさく

本日ここに恭しく尊前を莊嚴し

薫香くんこうを捧たてげ懇ねんろに妙典を誦誦して

法名釋○○、俗名○○○○の（就職・転職・退職）

を奉告す

夫それ惟おもみれば

三界は無常にして流き転窮きつりなし

なにもものもみな 久遠くおんより生滅变化し

留まることなし

古人 行く川の流れは絶えずして

しかも元の水にあらず

と詠むはこの意なり

また さるべき業縁のもよおせば、

いかなるふるまいもすべし

と宗祖仰せのとおり この身は因縁生起せしもの

蒙こうむる縁によりて 变化するのみなり

さればこのたび 諸事相整い

如来の御前おんまえに念仏申し奉告すること

有難き仏縁といただくなり

今日より 一層の聴聞に励み

弥陀召喚の念仏とともに人生を歩まんことを

敬つて白もつす

7. 新築・改築・引っ越し式

数多くの恩恵に感謝を

「人生で一番高い買い物は家」とよくいわれます。それだけにマイホームを持つことは人生で最も重要な行事の一つということになります。

家を建てるにあたっては、起工式や上棟式、竣工式など、さまざまな儀式を伴います。そうした儀式を仏式で行うことは、まだまだ例が少ないと思われます。しかし、できればそのような儀式も、仏式で執り行うことを勧めていただきたいと思います。

たとえば、工事を始めるにあたって行う儀式に「起工式」があります。これは世間では「地鎮祭」といつているのをよく聞きます。しかし地鎮祭とは、工事を始める前にその土地の神様を祭り、工事の無事を祈る神式の祭事です。これは神の力を当てにして、災いを除くところがはたらいています。また、この神事は呪術的な要素もあり、日の善し悪し、方位方角を選び、

穢れを忌み嫌うもので、浄土真宗のみ教えにはそぐわない内容です。

『歎異抄』には「念仏者は無碍の一道なり」という言葉があります。本願を信じて念仏する人は、あらゆる神々が敬ってひれ伏し、悪魔も、よこしまな教えを信じる者も、その歩みを妨げることはないのです。したがって、浄土真宗ではまったく地鎮祭の必要はないのです。



地鎮祭に対して仏式の起工式は、着工に至った数多くの恩恵に感謝し、まず仏さまにそのことを報告するとともに、気持ちを持ちを新たにし、工事の無事を願っておつとめをするのです。重要なのは、起工式は報恩感謝の心で行うということです



す。

家を建てるということは、数多くの条件がそろわないとできるものではありません。ご本人の努力は言うまでもなく、健康も、財源も、人間関係も、あるいは機材調達など、そんな数多くの条件の一つでも欠けたら、家は建たないのです。そうした数多くのご縁を喜び、ご恩に感謝する心を伝えたいものです。

近年の分譲住宅やマンションなどは、家を購入する人が工事にかかわらないこともあります。そうした場合でも、建物の竣工後や購入後に仏式にて祝いの法要をおつとめするとよいでしょう。また、改築にあたっても同様です。

お寺とのかかわり薄れないように

日本人の生涯引っ越し回数は、平均6回というデータがあります。引っ越しを経験しない人の方が少ないということでしょう。進学や就職、転勤など引っ越しの理由はさまざまだと思いますが、引っ越しも人生の転機となる重要な行事です。

引っ越しでは、ガスや電気、水道など転居届けが必要不可欠。しかし、お寺への連絡が後回しになっていくことが多いのではないだろうか。これまでお参りに行っていた門徒さんと、突然連絡がとれなくなるのはお寺としてたいへん寂しいものです。日ごろから、お寺とのつながりの大切さを伝えることが重要です。特に所属寺が変わるという時には、お世話になったお寺の阿弥陀さまにお礼の参拝をするように勧めてほしいと思います。

また、「遠く離れても所属寺は変更しないから、引っ越し先でお寺を探す必要はない」という人もあるかもしれませんが。しかし、それはお寺を「先祖や墓を守る

所」という一面で考えている可能性もあります。お寺は本来、「今生きている人が教えを聞く所」であり、今の生活を離れてあるものではないのです。所属寺は変わらなくても、引っ越し先の近くのお寺とご縁を結ぶことの大切さを伝え、お寺との関係が薄れないようにすることも大切ではないでしょうか。

引っ越し先の別院や教務所の所在地を知らせることも忘れないようにしましょう。

家の主は仏さま

新築・改築・引っ越しに伴い、新しくお仏壇を迎えられる際には、必ず「入仏法要」をします。引っ越しなどで、これまでのお仏壇を引っ越しされる場合は「遷仏法要」をします。

新築・改築・引っ越しなどは、人生の中でも重要な行事です。しかし、いろいろな手続きに追われるために、ついつい仏さまのことは後回しになってしまいます。ところが浄土真宗では、「何事も仏さまが中心であつ

て先である」という考えがあります。たとえば、いただき物をした時には、まずお仏壇にお供えます。それは新築・改築・引っ越しの際にも同様です。

浄土真宗では「その仏像をその家の主として我も仏家に同住して給仕すと思ふべし、我が家に仏を置くとは思ふべからず」という言葉があります。我が家に仏さまをお迎えするのではなく、家の主は仏さまであつて、その主である仏さまをお迎えするのだという入仏法要にあたっての心得です。



新築・改築・引っ越しは、人生の一大イベントで、新しい自分の人生、生活の始まりといえます。しかし、入仏法要や遷仏法要は、仏さまの家に仏さまをお迎えする儀式であつて、これから仏さま中心の生活をする出発点となるのです。

阿弥陀さまは、迷いの中でしか生きられない私たちに、いつもはたらきかけ、依りどころとなってくださる仏さまです。新築・改築・引っ越しに際して仏さまをお迎えする儀式をするのとはしないのでは、これからの人生が、確かな依りどころがある人生となるのか、迷いの中で不安のままに生きる人生になるのかの違いになるのではないのでしょうか。

※新築・改築引っ越し式のポイント※

寺院の新築や改築では「落成法要」を営むのが常です。一般の住宅購入後の最初の仏縁となるのは「入仏法要」という場合が多いと思いますが、新築の場合は「新築落成慶讃法要」と併せて営むことができます。改築の場合も「改築落成慶讃法要」となります。

初めての家の購入、新築については、人生でも重要な節目の一つといえるので、厳かに喜びあふれる法要となるように心がけたいものです。

新築・改築表白の文例

敬つて 阿弥陀如来の尊前に白もつして言もつさく

本日ここに有縁の人々相集まり

恭しく仏前を莊嚴し 懇ねんころに聖教を拝読して

〇〇家家屋新築（改築）の落成慶讃法要を

厳修し奉る

夫それ惟おもんみれば

日々心より安やすんじて仏を仰ぎ

教説に遇いまみえるは

屋根ありて風雨を避け

壁ありて寒暑をしのぎてのゆえなり

今日 諸事相整い 有縁各々の献身により

当家家屋の無事完成をみる

まことに

報じても報じ難きは弥陀の厚恩

謝しても謝し難きは有縁の尽力なり

爾今 相和して聞法に励み 以てうちに円満にして

念仏弘通に勤しまんことを

敬つて白す

引っ越し式表白の文例

敬つて 阿弥陀如来の尊前に白して言さく

本日ここに〇〇家引越しにあたり

恭しく仏前を莊嚴し 懇ろに聖教を拝読して

奇特最勝の妙典 時機純熟の真教に遇い奉らん

夫れ惟みれば

三界は無常にして 一切のものの因縁生起す

ひとたび縁のもよおせば

覚えず浮世も変転するなり

今ここに〇〇家 久しく過ごせし宅を出でて

新しき土地に移る これまた一つの縁なり

見知らぬ在所にて心細きこと多しといへども

光寿無量の阿弥陀如来 何処にても照覧あつて

大悲を垂れ賜うこと 真にたのもしく覚ゆるなり

爾今 内には琴瑟調和を心に掛け

外にあつては温和勤勉を旨とし

念仏弘通に勤み

以て広大の仏恩に謝し奉らんことを

敬つて白す

8. 入院・退院

病気になって道を知る

無常のいのちをもつて生まれてきた私たちは、老病死という無常の中にしか身を置くことができません。老いることも、病むことも、死ぬこともない世界を願っていても、それは不可能です。だからこそお釈迦さまは、この世は無常であり、人生は苦であると説かれたのです。

そんな人生の中で、入院をとまうような大きな病気になった時、さまざまな問いが生まれてきます。「これまで何のために頑張って生きてきたのか」「何が悪かったのか」「死んだらどうなるのか」「亡くなったあの人はどういう気持ちだったのか」。

このような根本的な問いや宗教的な問いは、人間の知識や経験では解決しようがありません。もがけばもがくほど不安は増し、心の中には深い闇が広がっていくのです。親鸞聖人は「弥陀の誓願は無明長夜のおほ

きなるとしびなり」と仰せになりました。そうした深い闇に、灯火となつてはたらかれるのが阿弥陀さまです。

病気に対して、病気を憎んでも、病気を避けようとしても病苦はなくなりません。むしろ病気によって今まで知らなかった自分や自分の心が見えてくると思うことが大切です。病気になることは決していいことではありませんが、病気になった以上、日常の忙しさや煩わしさから解放されたと思い、自分を見つめる時間にすることもできるのです。

私たちの先輩には、病気になって浄土真宗への道が開けたという人もおられます。病気というと、病気平癒や無病息災などを神社で祈願するものと考える人が多いようですが、それで病気から完全に逃れるということは不可能です。病気になった時こそ、本当のよりどころとなる教えを聞くことが大切です。入院までに時間的、体力的に余裕がある場合や、退院後に体調が戻った場合は、お寺への参拝を勧めたり、み教えを聞くきっかけをつくっていただければと思います。

仏法は病床での妙薬

あるご門徒のおばあちゃんが、十一月のお寺の報恩講を前に往生されました。臨終勤行の後、娘さんに「だいぶ具合が悪かったんですか」と尋ねると、以前からガンを患っておられ、入院後は見る見るうちに病状が悪くなったということでした。病気のこととはまったく知らなかったので驚きでした。

おばあちゃんのお宅は、月参りのご縁はなかったのですが、お寺の法座には毎回出席される篤信の方でした。八月の盂蘭盆会と九月の彼岸会を欠席されたので、どうされたのかみんな心配していました。おばあちゃんにとっては、三月の春の彼岸会が最後のお寺へのお参りでした。

おばあちゃんがいつも一番前の席で法話を聴聞されていたことを話すと、娘さんは「母はいつもお寺の法座を楽しみにして、カレンダーに予定を書き入れていました。病気のこととは告知を受けていたので、いつもこれが最後という気持ちでお寺に参拝していたと思います」と涙ながらに話されました。

そして、「母は入院中に『行く所は決まっている。

ありがたい、ありがたい』と言ってました。私は宗教にはまったく関心がなかったのですが、それを聞いてやはり信仰を持つことは大切なことなんだと、いま六十歳を過ぎて初めて思うようになりました」としみじみとした表情で話されたのです。母親の言葉を通して、阿弥陀さまのはたらきを感じ取られたのだと思いました。

私たちはいつ病気で入院することになるのかわかりません。急に入院を余儀なくされることもあるでしょう。しかし、病気で入院することになった時、それが大病ではなくてもお寺にお参りをして阿弥陀さまのはたらきに触れることは、病床での不安をやわらげる妙薬となることでしょう。

大いなるものにいのちをまかせる

病気療養のため、しばらく月参りをお休みされている門徒さんがひょっこりとお寺を訪ねてこられました。話を聞くと、自宅で療養中に急に病状が悪化し、救急

車で運ばれ、およそ二カ月の入院の後、ようやく退院できたので報告に来たとのことでした。

しばらく玄関で会話をしていたのですが、せっかく久しぶりに来ていただいたのだからと、本堂で退院の報告参拝をすることになりました。

その門徒さんは、体調を崩される前は、お寺の法座に毎回出席しておられた方で、久しぶりの本堂で阿弥陀さまに手を合わせ、「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と深々と礼拝をしておられました。そして「いやー、ずっと病室にいたからでしょうか、今日は特別にお寺の本堂の温かさを感じます」と感慨深げでした。殺風景な病室とは違い、お寺の本堂は、阿弥陀さまのお慈悲の温かさや同行の温かい思いに溢れていることを感じておられたのでしょうか。

大病を患い、「これまで自分で生きていると思っていたが、生かされているいのちだった」と言ったご門徒もありました。生かされているいのちであるからこそ、私を生かしている大いなるものにいのちをまかせ、手を合わせて生きていく道も開かれるのでしょうか。

病気が治って退院できたと喜ぶだけでは、いろいろ

なご縁によって生かされてきた有難いいのちであったことを見失い、また病気になった時には不安にかられることになります。退院後に体調が良くなった時は、ぜひ家族一同でのお寺への参拝を勧め、いのちの尊さを見つめ直し、そのいのちをいつも包み込んでくださっている阿弥陀さまのはたらきに感謝することの大切さを伝えたいものです。



入院表白の文例

敬つて西方願王阿弥陀如来 人界の教主釋迦如来

並びに十方三世一切の三宝に白して言さく

この度法名釋○ 俗名○○○○○

病を受け入院するに先立ち

仏前を莊嚴し 懇ろに妙典を讀誦して

ひと時の勝縁をいただきまつらん

夫れ惟みれば

生まれしもの老病死の苦を負うことは

世尊の遺教にして 人界の相なり

しかるに我ら 煩惱にまなこさへられて

諸行無常の境涯をしらず

宗祖聖人 いささか所勞のこともあれば

死なんずるやらんと心細く覚ゆることも

煩惱の所為なり とも仰せなり

阿弥陀如来 かくの如き我が姿を照覽あつて

必得往生の妙果を回向したまへり

これまことに 報じても報じ難き恩徳なり

このうえは先ず養生に専念し 身を勞い

念仏とともに報恩の日夜を送らんことを

敬つて白す

退院表白の文例

敬つて大慈大悲の阿弥陀如来の御前に白して言さく

この度法名釋○○○ 俗名○○○○○

退院し 漸く仏前をととのえ 薫香を捧げ

称名讃嘆の喜びを得る

顧みれば 遡ること○週間（○カ月）

病を受け入院してよりこの方

燈香華も贖えず 念仏の音声も憚られ

ただ臥床に合掌するのみ

しかしながら 光寿無量の弥陀如来

常に照覧あつて大悲を垂れたまふこと

まことに有難く たのもしく憶ゆるなり

今再び阿弥陀經所説の如く莊嚴をととのえ

本仏と仰ぐ喜び この上もなし

今後はひとえに回復に努め

益々念仏奉持の日々を送らんことを

敬つて白す

9. 厄年

「厄年」を気にするのは愚かなこと？

私たち浄土真宗僧侶は、「厄年」をこれまでは占いを元にした俗信であると片付けて、問題が解決したと考えてきたのではないのでしょうか。また、「厄年にとられることは、占い・加持・祈祷を行わないという親鸞聖人のご法義にそぐわないものだ」「正しくご法義をいただくことでそういった俗信から離れることができるのだ」という理解を

もとに、世間の人々が「厄年」というものに対して持っている漠然とした不安な気持ちに寄り添うことなしにそれを否定し、厄祓い・厄落しといった行為については、仏教の教えを聴かない者の愚かな行為と



軽蔑したり、滑稽な姿として受け止めてきたのではないのでしょうか。

「厄祓い」は国民的通過儀礼

現代における「厄年」の実態について実証的に調査したものはほとんどありませんので、確たることは言えないのですが、ライフネット生命保険が二〇一六（平成二十八）年六月に実施した『現代人の「厄年」意識調査』において、二〇歳から五十九歳の男女一〇〇〇人という小規模ではありますが、全体の半数が「厄年を気にする」という回答であったそうです。また、読売新聞社が二〇〇八（平成二十）年五月に、全国の有権者三〇〇〇人を対象として「宗教観」をテーマに実施した世論調査では、有効回収数一八三七人のなかで「厄払いをしに行く」と答えた方は、34・2%という結果になっています。つまりは、受け止め方や程度に差こそあれ、「厄年」が自分の人生のなかで何らかの影響を持つと考えている人々が数多く存在しているのです。もちろんそのなかにはいわゆる浄土真宗の門信

徒もおそらく少なからず含まれていると考えられます。そのように、もはや「国民的」と言ってもよい通過儀礼として「厄年」の厄祓い・厄落としが行われているのです。

浄土真宗流「厄年」儀礼

もちろん、科学的な見地や浄土真宗の教義から「厄年」の思想を批判することは簡単です。殊に、「厄年」をネタに人々の不安をあおり、それを金もうけに結びつけるような行為は決して許されるものではありません。むしろ、そのような行為を行う者や団体にだまされる人をその抑圧から解放することが私たちの使命であるのは言うまでもないでしょう。ただ、ここでは【法話の参考に】の項目で紹介している「厄年」をポジティブに捉える、人生における大きな転換点と捉えるという考え方を以て、厄年にまつわる儀礼というものを、浄土真宗流にうまく転化し行うことはできないかということを提案してみたいと思います。世間一般に「厄年」といわれる年齢を迎えるということで不安を抱え

る方々を対象としてお寺に集まっていただき、ご本尊の前で勤められる厳かな勤行や法話を通して浄土真宗の教えに関心を持ってもらうことはできないでしょうか。われわれ僧侶の多くは「厄年・厄祓い・厄落とし」というものを、悪しき風習としてのみ受け止めてきたように思いますが、むしろそれをひとつの縁として、新たな伝道場を創出することができれば幸いです。

※厄年のつどい ポイント※

「本厄」である男性四十二歳、女性三十三歳といえ、仕事や育児など忙しい時期で、寺院活動や仏事にはあまり関心を持ってもらにくい年代です。その年代の方々を中心に、普段お寺に運んでもらうことが少ない若い世代を対象にして行事を開催できれば、大変有意義なことでしょう。しかしながら「厄年のつどい」を単独で開催することは難しいと思いますので、元日会や常例法

座など、年末から年始の時期に開催される定期的な行事と併催という形で行うことが現実的かもしれません。

開催にあたっては、参加者の「厄年」に対する不安な気持ちに寄り添うための聞き合いや話し合いの時間を設けてみましょう。そこに集う参加者がそれぞれの不安や苦しみを共有することが大切です。法話の際は「厄年」の歴史的起源や仏教的解釈、宗祖や蓮如上人のご生涯における「人生の転換点」という考え方を紹介してみてもいいでしょうか。

また、参加者に腕輪念珠や懐中名号など、記念品として贈呈すると喜ばれることでしょう。懐中名号に関しては、ご本山免物が望ましいとは思いますが、それよりもさらに小型の携帯用極小サイズのものを販売されている仏具店があります。浄土真宗では「お守り」とはいえませんが、決して粗末には扱わないことをお願いしたうえで、常時携帯してもらえらるサイズの御名号があってもいいのではないのでしょうか。

厄年表白の文例

敬って大慈大悲の阿弥陀如来の御前に白して言さく
ここに法名釋○○ 俗名○○○○ 齡○○歳を迎え
恭しく仏前をととのえ 薫香くんこうを捧げ 仏徳を讃嘆す



夫れ惟おもみれば

巷間こうかんに〇〇歳は厄年といひ

除災厄除じよやくよけを願ひ 祈禱すべきとなり

されど 我ら釋迦一代の教説に遇ひ

因果の道理を聴くものなれば

厄に惑わず 除災を願わず

このたびは 日夜照覧あつて大悲を垂たれたまう

阿弥陀如来の高徳を忘れず

妙法に遇わんがための勝縁いただと戴いたくなり

ただ 厄年は齡重よわいねて身体不安しんたいなる時節と説けるも

あり

この説不詳ふしょうなれども 粗略そりやくにすべからず

なんとなれば 身体大事しんたいにするは

幾多の不思議の縁により 生まれしものの務めなり

希こいねがはくは 今日こんにちより一層の聴聞を志し 摂生養生

怠りなく

弥陀召喚の念仏とともにこの境涯きやうがいを歩まんことを

敬つて白もつす

勤行に用いる和讃

一切の功德にすぐれたる

南無阿弥陀仏をとふれば

三世の重障みなながら

かならず転じて輕微なり (九八)

仏号むねと修すれども

現世をいのる行者をば

これも雑修となづけてぞ

千中無一ときらはる (一八五)

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ (二七三)

法話の参考に

そもそも厄年って？

もともと、「厄年」は陰陽道の説で、大陸から伝来して遅くとも平安時代より公家や武家の社会で行われ、近世に至って民間にも広まったもので、その間、日本的な変容を遂げて今日に及んでいます。古くは十二支の思想などを用いて「厄年」が決められていましたが、現在のように語呂合わせによる男性四十二歳（死に）、女性三十三歳（散々）を大厄と考えるようになったのは江戸時代以降といわれています。少なくとも浄土真宗が開かれる以前から「厄年」という思想は存在し、現在まで形を変えながらも大衆に根強く信じられてきています。ただし、厄難逃れのために厄祓いや厄落としをするのは、近代に入ってから考案された儀礼のようです。また、「厄年」は民俗学的に言うところ、否定的に捉えることだけがその解釈ではなく、その例として「厄」は「役」に通じ、むしろ人生の折り目あたり、大いに祝う必要があつて、年祝いも行われた

そうです。

宗祖にも「厄年」があつた？

本当に偶然ですが、宗祖が流罪赦免より三年後、東国への布教を開始されたのが一二一四（建保二）年四十二歳のとき。その後約二十年間東国での布教活動が続けられることになります。それはいわば宗祖の人生における大きな転機であつたともいえるのではないのでしょうか。

同じく第八代蓮如上人は、一四五七（長祿元）年四十三歳のとき、父親である第七代存如上人が遷化され、法灯を継承されました。その後、積極的な伝道を展開され、浄土真宗教団の流れが大きく変わる転換点になっているとも考えることができます。

一般には悪いイメージでしか語られない「厄年」を、むしろ人生の転換期の良き仏縁と考え、私たちの伝道教化の場を創造していくことが出来るのです。

10. 長寿祝い

「人生百年の時代」と言われるようになりました。

平均寿命が八十歳を超え、ピンピンコロリならまだしも、老いや病気の苦しみの中にあっても医療の発達が簡単に死ねない時代を形作っています。高齢化社会のまっただ中で、「長寿は本当にめでたいのか」と言う人もあるかもしれません。

しかし、私の「いのち」がこの世に生まれ、人としてたまたま仏法、お念仏の教えを聞くご縁に恵まれたのは本当に有ること難い、幸運の中の幸運であるといえるのです。

平均寿命が八十歳を超えたといいますが、心身ともに健康で充実していて、自在に行動できる時期は限られています。その中でお寺に参詣していただきお聴聞に励むことができる時間は更にわずかです。「いのち」を恵まれたご縁の中でお寺に参詣できる幸せをよろこび、あるいは仏法を聞くご縁に恵まれたことをよろこび、「いのち」の節目をよろこぶ機縁が長寿祝いです。

お寺で祝うということは、仏さまの前で、寺の住職や坊主、そして同じようにお念仏をよろこぶお同行が共に祝うということです。

おつとめをして仏さまに報告するのはもちろん、仏さまの声を聞くことができる「いのち」を恵まれたこととお斎を共にして、一緒によるこび合うのもいいことです。もちろんお寺に参れなくなったあかつきには、自宅のお仏壇の前でお祝いすることをお勧めしましょう。

※長寿祝いのポイント※

子や孫と共に

いのちの尊さを伝えてきたお念仏の教えを、今までご縁のなかった人に伝えることは大切です。長寿の祝いをご縁にしてご本人にゆかりのある若い人にお寺に来てもらい、祝福の中でお念仏の教えに遇ってもらおう。そして仏法を聞くことで「いのち」のつながりを感じてもらい、同じ価値観の

共有をしてもらうことが大事です。

昨今の墓じまいや仏壇じまいなどには価値観の断絶を感じますが、次の世代に大事にしてほしいことを伝えてこなかった反省を込めて、是非取り組んでみましょう。

参考として

長寿祝の由来と色

まず還暦とは十干十二支のエトの組合せが一巡し、誕生年のエトに還ること。満六十歳（数え年六十一歳）で本卦還りともいいます。赤の衣類、特にちゃんちゃんこを着用する風習があります。仕事が一段落したり、体力面や健康面で不調があらわれたりする人もおられるかも知れません。ゆつくりとお寺に参詣し、今後の人生の行方を思索する機会としても、還暦参拝をお勧めしましょう。

続いて古稀とは七十歳、中国の唐代の詩人、杜甫とほの詩の一節である「人生七十、古来稀まれなり」に由来して

います。現代では還暦はまだまだ壮年ですが、古稀からがいよいよ老年の入口ということになるのでしょう。紫色が祝いの色とされます。

喜寿きじゅとは七十七歳、「喜」の字の草書体が「𠂔」が七十七を合わせた形になっていることに由来します。古稀と同じく紫色が祝いの色とされます。

傘寿さんじゅとは八十歳、「傘」の略字が八と十を重ねた形になり、八十と読めることに由来します。黄（金茶）が祝いの色です。

米寿まいじゅとは八十八歳、「米」の字を崩すと八十八と読めることに由来します。傘寿と同じく黄（金茶）が祝いの色です。

卒寿そっじゅとは九十歳、「卒」の略字である「𠂔」が九十と読めることに由来します。白色が祝いの色です。

白寿はくじゅとは九十九歳、百から一を引くと「白」となることに由来します。卒寿と同じく白色が祝いの色です。紀寿きじゅ（百寿ひゃくじゅ）とは百歳、百年が一世紀ということから紀寿。また百歳であることから百寿とも言われます。卒寿、白寿と同じく白が祝いの色です。

長寿（還暦・古希・喜寿・傘寿・米寿・卒寿・
白寿）祝い表白の文例

敬つて 阿弥陀如来の尊前に白して言さく

本日ここに 法名釋○○ 俗名○○○○ ○歳となり

還暦（古希・喜寿等）の祝いを迎えるにあたり

恭しく仏前を莊嚴し

經典を誦誦して仏縁に遇いまみえる

夫れ惟みれば

世尊 諸行は無常なりと説きたまう

人の寿命もまた然なり

朝には紅顔ありて 夕べには白骨となれる身と

聴く中に ○○歳の命を保つこと

まことに不思議な宿縁といへり

また 家族知友の厚情 高配によるところ

今さらながら深謝すべきなり

今日までの有縁の温情 努々忘るべからず

希はくは 爾今 一層の養生を心に掛け

勤行に用いる和讃

念仏とともにこの境涯を過ごさんことを
如来 日夜照覧あつて 哀愍摂護したまへ

阿弥陀如来来化して

息災延命のためにとて

金光明の寿量品

ときおきたまへるみのりなり（九六）

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける（一二五）

弘誓のちからをかふらずば

いづれのときにか娑婆をいでん

仏恩ふかくおもひつつ

つねに弥陀を念ずべし（二〇四）

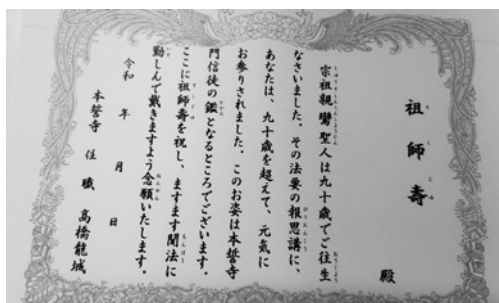
参考として

ご往生の歳を記念に

卒寿である九十歳は浄土真宗門徒にとって特に由緒のある年齢です。宗祖親鸞聖人が一二六三（弘長三）年にご往生された年齢で、宗祖と同じ年齢までよく生きてこられたと、特に感慨のある年齢です。宗祖が生きられた鎌倉時代は飢饉や戦乱の多い時代で、平和で医療技術の進歩した現代との相違は大きいですが、老いや病いの苦しみを越えて、九十歳を迎えられた人生の有り難さを仏さまの前で手を合わせて感謝する「鸞寿」「祖師寿」と名付けることもできます。親族やお同行と一緒によろこび合っていただければ、すばらしい法縁となることでしょう。

そんなことを言っても、とても九十歳までは難しいと思われる方には、八十五歳でご往生された蓮如上人にちなんで、八十五歳でのお祝いを「蓮寿」として祝うことも良き法縁となることでしょう。さらに若いうちと思う方もいるでしょう。傘寿である八十歳はお

釈迦さまがインド・クシナガラで入滅された年齢です。お釈迦さまの時代もそんなに衛生状態の良い時代ではありませんから、現代と比べものにならないくらい稀有な尊いことであつたでしょう。そんなお釈迦さまと同じ年齢まで生きさせてもらったよろこびを、「釈寿」としてお寺で迎えていただくことは意義深い法縁となるでしょう。



11. 生前葬

メリットと注意点

当然のことですが、自分の葬儀を自分で執り行うことはできません。しかし、それを可能にするのが生前葬です。生前葬はまだまだ一般的ではなく、経験したことがあるという人は少ないのではないのでしょうか。

生前葬はその名の通り、自分が生きている間に自分の葬儀を行うというものです。お世話になった家族、友人、知人を招いて、感謝の気持ちを直接伝えることができるのが最大のメリットといえるでしょう。

最近のNHK連続テレビ小説「まんぷく」では、この生前葬のシーンが放送されました。ここでも生前葬を



行う理由は、（主催者が）死んでしまつては、皆さんとお別れの挨拶ができないからというものでした。実際の葬儀のようなお荘厳で、主催者が棺の中に入るといふシーンもあり、興味深く見られた方も多いと思います。一般視聴者の反応もおおむね良好ということでした。

生前葬の内容に決まりはなく、主催者が自由に決めることができます。実際にどのようなことができるのかを考えてみたいと思います。

- ・ 主催者や参列者（招待客）のスピーチ
 - ・ 乾杯と会食、歓談
 - ・ プレゼントや花束の贈呈
 - ・ これまでの人生を振り返る映像やスライドの上映
 - ・ 思い出の曲や好きな曲の鑑賞（生演奏も可能）
 - ・ ビンゴゲームやカラオケなどの余興
 - ・ 招待客の見送りや会葬御礼のプレゼント
- 次に生前葬を行うメリットや注意点を考えてみたいと思います。

- ・ 自分の口から、お世話になった人たちに直接お礼を言うことができる。
- ・ 一般的な葬儀よりも自由度が高く、自分の思い通

りの葬儀を行うことができる。

・形式にこだわらなければ葬儀費用を安くできる。

また、注意点も多々あると思います。

・まだまだ一般的ではないので、参列者（招待客）

への配慮が必要（服装や香典、会費など）。

・家族、親族の理解と同意を得ておく必要がある。

・生前葬を行ったとしても、実際に亡くなった時には火葬をしなければならない（葬儀をするのかしないのかも含む）。

自己満足の儀式ではない

「終活」がブームとなっている現在、「死んでからでは、お別れのあいさつができないから」という理由だけで生前葬をつとめるならば、主催者の「最後の自己満足」という意見もあるかもしれません。しかし、仏教では伝統的に生前葬を続けてきたという一面もあります。その仏教における生前葬の具体例としては、比叡山の千日回峰行での「生き葬式」があります。千日回峰行は、比叡山山内をおよそ千日、七年間にわたり

巡拝する回峰行ですが、五年七百日を終えると、修行の中で最も過酷とされる「堂入り」が行われます。ここで行われるのが「生き葬式」です。

「堂入り」は、行者が一人で無動寺明王堂に九日間 にわたり籠もるという行で、この間は食べることも、一滴の水を飲むことも、眠ることも、体を横にして休むことも許されません。堂入りの際、行者は師僧や兄弟子たちの先導で堂内に入りますが、ここから生きて再びみんなに会えるという保証はありません。そこで、「生き葬式」が行われるのです。

「生き葬式」で行者は、師僧や兄弟子をはじめ、信者も見守る中、百八遍の祈禱を行います。この間に、別れを告げるために集まった信者や諸僧は、一人また一人と堂を離れていきます。信者の中には涙を流しながら別れを惜しむ人もあります。最後に行者一人が残る、ここから九日間の修行に入るのです。

行者が生きてこの行を終えられるという保証はないので、堂内にいた信者や諸僧は、文字通り「生き葬式」で最後の別れを済ませるのです。行者は死の覚悟をもつて自分の葬儀を行い、参列者は行者を一人残して堂を

離れることによって生前最後のお別れをする。このことによって、当たり前のように生きてきた両者の間には、これまでの関係の総括が行われ、新たな結びつきが生まれる。このように生前葬は、本人と参列者にとって重要な意味を見出せる極めて宗教性の高い儀式なのです。

現在では、医師からのがん告知や余命宣告は当たり前前の時代になってきました。また、現在の日本の世帯状況を見ると、三世帯に一世帯が単身世帯、いわゆる「おひとりさま世帯」に突入しているということも見逃せません。単身世帯といっても、家族と離れて暮らしているという人から、身寄りのない人まであります。その中で、しっかりと自分の葬儀をまかせられる親類や知人がいない人も今後、増加してくるという現状があるのです。

突然、死の覚悟を迫られる時代、自分の葬儀をしてくれる人は誰もいないという時代はもうやってきています。「死を覚悟の上でやる」「動ける間にやる」生前葬を考えると、こうした深刻な社会事情は無視できない状況にあります。そうした不安に直面した人たちが

が、これまでの人間関係を総括し、新たな関係を築くことができるような宗教儀式として、自己満足のイベントで終わらない生前葬のあり方を考えなければならぬ時代になっているのではないのでしょうか。

浄土真宗の生前葬

先にも述べたように、生前葬はまだ一般的ではなく、その作法や式次第もありません。しかし、生前であっても葬儀として仏式の儀式として執り行う場合には、式次第の策定が必要と思われます。

中でも導師がどのような作法を行うのか、法名をどうするのかは僧侶の立場からは重要です。作法については、葬場勤行に近い形にするという方法もあります。法名は生前に帰敬式を受式しておかなければならないという規定をクリアしなければなりません。

いずれにせよ生前葬は自由度が高いというメリットがあるというのが特徴です。作法については葬場勤行に近い形としながらも、よりコンパクトにすることも可能でしょう。また、勤行に仏教讃歌を取り入れると

いうことも可能です。

一般の葬儀のように、参列者は座っているだけという形式ではなく、主催者も参列者も一緒に参加できる形式を作ることも可能です。しめやかな儀式というだけではなく、仏さまの温かさに包まれた法味豊かな儀式となるように努力するべきでしょう。

生前に死を疑似体験

寺院主催のイベントで、「死」と「人生」を考える「死の体験旅行」に申し込み殺到というニュースを目にしました。

これは、自分が病気になり、残り数カ月の命となってしまったと仮定し、遠く感じる「死」を疑似体験しようというワークショップでした。

使うものは想像力とペンだけです。まず、二十枚のカードに参加者が大切に思っている人や物、行為などを書いていきます。次に参加者は、自分が病気になり、少しずつ心身が弱っていくと仮定して、死に近づいていく中で二十枚のカードを順番に手放していくのです。

捨てたカードについて、「これでよかったのだろうか」

と思いがめぐり、大切なものが失われていく感覚に、思わず涙がにじむそうです。体験を終えると、数人を感じたことを話し合います。そして、全員で最後に残ったものは何だったのかを一人ずつ順番に話していきます。

この体験を通して、「自分がいよいよ死ぬという時、遺していかなければならない家族のことが心配になった。家族をもっと大切にしたいと思ったのと同時に、これからは仕事の顧客の不安を理解し、安心させてあげられるような仕事をしたいと思った」という人もありました。

このようなワークショップを取り入れることも、生前葬をより意義深い儀式とし、定着させていくことにつながるのではないかと感じました。

生前葬表白の文例

敬って西方願王阿弥陀如来 人界の教主釋迦如来

並びに十方三世一切の三宝に白して言さく
 本日ここに恭しく尊前を莊嚴し
 懇ろに妙典を誦誦し
 法名釋○○ 俗名○○○○の生前葬を営む
 夫れ 人界は無常にして生あるものは
 かならず死に歸し
 盛んなるものはついに衰うるならいなりといひ
 会者定離の理にして
 やがて別離の苦を受くること逃れ難し
 然ればここに 親族知友の臨席を請ひ
 今日までの厚意 友誼を面前に深謝し
 以て今生の節目とするなり
 また 生者必滅の境涯にあつて
 阿弥陀如来建立し給える 攝取不捨 俱会一処の
 誓願のたのもしきこと
 称名讃嘆のなかに仰ぎ奉るなり
 希はくは臨席の有縁 己が命終に思いを致し
 深く本願を聞信して

念仏の大道に歸入せられんことを
 敬つて白す

勤行に用いる和讃

十方諸有の衆生は
 阿弥陀至徳の御名をきき
 眞実信心いたりなば
 おほきに所聞を慶喜せん (二五)

如来の興世にあひがたく
 諸仏の経道ききがたし
 菩薩の勝法きくことも
 無量劫にもまれらなり (六八)

恩愛はなはだちがたく
 生死はなはだつきがたし
 念仏三昧行じてぞ
 罪障を滅し度脱せし (一二八)

12. 葬 儀

葬儀のあるべき姿

人生にはさまざまな通過儀礼（人生儀礼）があります。中でも特に厳粛な儀式が葬儀です。不思議な縁によって出会い、触れ合った人との「この世」でのご縁が尽き、人生最後のお別れをする儀式です。また、現代の浄土真宗では、亡き人を縁として、改めて生かされている「いのち」の尊さに気づき、かけがえのない人生を大切に生きる心を教えられる「時」であり、「場」であると考えます。

そのような人の人生において最も大切ともいえる儀式を執行する立場として、僧侶はさまざまな責任を負わなければなりません。

そのことは、大阪教区重点プロジェクト推進部会において、二〇一二（平成二十四）年から六年間にわたり、「葬送儀礼」を実践目標としてさまざまな研修会、協議会等を開催し、教区内で周知・共有してまいりま

した。二〇一四（平成二十六）年には「葬送儀礼」寺院用テキストを発刊し、大阪教区として「葬送儀礼」のあり方を提唱し、各方面から反響をいただきました。テキストでは「葬送儀礼」のあるべき姿について、専門家が多角的に論じておりますので、すでにご覧になられた方も、今一度読み返していただき、葬儀執行者として負わなければならない責任を再確認していただければ幸甚に存じます。



また当部会では、テキスト発刊後も儀礼の重要性についてさまざまな角度から学び、伝道教化だけでなく、儀礼を正しく厳粛に行うための勤式作法をはじめ、模擬葬儀の実演（写真）、葬儀社との協働、グリーンケアなど多岐にわたる知

識、修練の必要性を確認してきました。

しかし、そういった取り組みをする一方で、近年葬儀スタイルの変化が急激に進んでおり、その変化に対応していくこともわれわれに求められています。

「一日葬」「直葬」の増加

近年における社会環境の変化、とりわけ「無縁社会」と表現されるような、地域コミュニティにおけるつながりの希薄化、高齢単身世帯の増加等の影響で、葬送

葬儀の種類	取扱件数(件)	割合
一般葬	268,473	63.0%
家族葬	120,960	28.4%
直 葬	23,450	5.5%
一日葬	11,976	2.8%
社 葬	1,150	0.3%
合 計	426,009	100.0%

儀礼の簡略化が進んでいるのは周知の事実です。二〇一七（平成二十九）年の葬儀の種類別年間取扱件数（公正取引委員会調べ）は表の通りで、家族葬が全体の約三割で、今後増加傾向にあると

のことです。直葬は5%強で、まだまだ数としては少ないようですが、増加傾向にあることは間違いなく、二〇一三（平成二十五）年NHK調べの統計では、関東での直葬の割合が二割を超えているとの結果が出ています。関西では一割にも満たない結果ですが、今後増加傾向にあることは間違いないようです。

実際の現場でも、大阪、特に大阪市内中心部においては、肌感覚として、葬儀全体の件数のうち家族葬がほとんどを占めているように思いますし、通夜を行わない「一日葬」を希望される場合もあります。「直葬（火葬式）」については寺院が立ち会わない場合があるので、現状を把握するのは困難ですが、葬儀社からの情報では二割ほどを占めているということを聞いたことがあります。実際、遺族の立場で考えると、「一日葬」では、遺族が高齢の場合、身体的、精神的にも負担が少ないうえ、遠方から参列する親族などの宿泊費などの経費も節約できるという利点があります。「直葬」については、日本で広まる前からアメリカでは一般的でダイレクトブリアル、ダイレクト・クリメーションと呼ばれ、家族のみで一晩過ごし、火葬にする方法です。他

人を介さず、家族のみで静かにお別れをすることができるといふ利点があります。日本では古くから葬儀と結婚式は家の儀式と考えられていたので、世間体と見栄が重視されてきました。ところが、バブル崩壊や先述の「無縁社会」などにより、世間体、見栄を考える必要がなくなってきたという背景と、合理主義とが一体となり、葬儀の簡略化が急速に進んだのだと考えられます。

そのような状況のなかで、多くの住職は、既存の葬儀規範に沿った葬儀を執行したくても、できるだけ簡単に済ませたいと考える遺族の希望を無視できないというジレンマに苦悩されていることと思います。そもそも葬儀に限らず儀礼というものは、時間をかけてわざわざ面倒なことをする行為です。おおよそ合理的という言葉とは正反対の行いをするに価値を置くものであるはずなのに、葬儀を簡単に済ますという合理主義的な考えが主流になっています。おそらく今後は、遺族の希望で「一日葬」や「直葬」をしなければならぬことがさらに増えてくると思われます。もし、われわれがそのような状況を否定的にとらえて、こちら

側の主義主張を押し付けることに終始するならば、世間にとつては、一般の考え方と乖離した教団、僧侶の姿と映るでしょう。

葬儀の新しい形

既存の葬儀規範は、先人が苦勞して作りあげてくださった素晴らしいものであり、遺族との合意のもと、規範通りに丁寧に葬儀を行うことができればそれに越したことはありません。

しかし、もし遺族が「一日葬」や「直葬」を強く希望される場合、規範通りの葬儀を無理に勧めることはできません。では、規範通りの葬儀を行うことは絶対に必要なのでしょうか。もともと葬儀というものは習俗的なものであり、そこに後付けで宗派的意味を付すこと自体に無理があるともいえなくはありません。

近代以降、浄土真宗における葬送儀礼の一連の儀礼には、おしなべて「報恩感謝」のために行うものだという意味づけがなされています。通夜をしない「一日葬」や「直葬」を行うとなると、時間的、物理的にも

儀式のなかに「報恩感謝」の意味を付すことは難しくなります。では、通夜を行う意義や、「報恩感謝」のために行うものだという意味づけの根拠は何なのでしょうか。今一度確認してみたいと思います。

『浄土真宗本願寺派葬儀規範』解説』では通夜勤行を次のように解説しています。

「通夜勤行」とは葬場勤行までの夜毎に、近親者をはじめ、有縁の人々が仏前に集い、夜を通して執り行う勤行です。故人の生前の厚情に感謝しつつ、後に遺されたものも、阿弥陀如来に等しく摂め取られていることに対して、「報恩感謝」の思いかから行う勤行です。なお、「通夜」は、「仏教における意義」のところで述べましたように、釈尊の入滅に接して涙に暮れる阿難尊者に対して、阿菟楼駄尊者が、日頃、釈尊から聞いていた教えを、夜を徹して説いたと伝えられているところにも、その由来を窺うことができます。厳然たる無常の道理を知り、仏法に耳を傾けるという「法縁」が開かれていると心得ておかなければなりません。

このように、經典をもとに通夜勤行を行う根拠が解説され、それと同時に通夜勤行に伝道上の大きな意味を持たせています。しかし、実際には近代に至るまでは式としての通夜というものは重要視されていませんでした。例えば、一九〇三（明治三十六）年一月十八日に第二十一代明如上人がご往生なさいますが、その際の通夜に大きな法要が行われたということは記録にないようです。これは宗主の葬儀であるから特別な通夜儀礼がなかったということではないようです。一九〇三（明治三十六）年に真宗福音協会から出版された『在家節用真宗宝鑑 全』は本派、大派の門徒向けの真宗解説書ですが、葬送儀礼についての箇所に通夜についての特別な記載は見られません。葬送儀礼についての記載は以下の通りです。

送葬の節に遺骸を沐浴せしめ、俗人は剃髪せしめ法名を授く、是れ已に仏弟子たる上は健在の時より剃髪すべき身なれども、真宗はそれに及ばずして厭世せざる故に、没後にその式を遂げしむ、是入仏法の軌則を表するなり（中略）出棺の時必ず

俗人は剃髪式をするものなるが、平日帰敬式を受けたる人及び僧侶は此限りに非ず、(中略)葬式の諷誦真宗にては門末一統に舌々行『正信偈』念仏『和讃』を定式とす、(中略)僧家出棺の時肩入の式あり、(中略)葬式畢りて以後即日或は三五日或は何個月、何年日等地方道俗によりて不定なれども、斎戒を設くることを仕上会と称するは古へよりの作法と見ゆ

右のような内容で、通夜式に関する記載は見当たりません。百年余り前には現在のような通夜に対する意味づけは存在しなかったということになります。親鸞聖人の教えが変わらないのはもちろんですが、葬儀規範というものは、時代の変化に応じて見直されていくものです。過去の習慣を今一度見直して、取り入れることができることは取り入れる、今までなかったものを新しく取り入れてみることも必要なかもしれません。仮に、通夜を行わない「一日葬」や「直葬」を行わなければならない状況になったとしても、決してそれを否定的に捉えずに、そこに遺族に寄り添う気持ちと、

限られた時間のなかでも最善を尽くすことが大切なことであると思います。「直葬」をされる場合は、そこに立ち会う機会すらないというのが現実ではあります。例えば、筆者の個人的な意見ですが、教区で各火葬場に常駐の僧侶を派遣するシステムを構築することができれば、希望者には炉前でお勤めをさせていただくことができ、「直葬」をただの「直葬」で終わらせないことができるかもしれません。また、「直葬」をしたあとに、きちんとした葬儀をすれば良かったと遺族が後悔される場合がありますが、そのときは、例えば「後日葬」という形であらためて葬儀を執り行うこともできます。それぞれの事情に応じて、より良い葬儀ができるようにしたいものです。その際、既存の規範にとらわれすぎることなく、臨機応変に向き合っていくことが大切だと思います。

最後に「式中初七日」について申しあげておきます。葬儀の簡略化に伴い、還骨勤行の省略で、火葬後の初七日法要の代わりに、葬場勤行の最後に初七日法要を組み合わせるという方法で、大阪ではここ数年で行われるようになったスタイルです。そもそも還骨勤行と

初七日法要とを一緒に勤修することすら許されない住職もいらつしやると存じますが、簡略化がエスカーレーターとして、ついにここまで来てしまったかという印象です。もちろん間違ったスタイルであることは明白です。この場合、初七日法要自体を省略することも一つの方法でしょう。

葬儀表白の文例

敬つて大慈大悲の阿弥陀如来の御前に白^{もつ}して言さく

本日ここに 恭しく仏前をととのえ 薫香^{くんこう}を捧げ

仏徳を讃嘆し

法名釋○○ 俗名○○○○の葬儀を勤修す

夫れ惟^{おも}みれば

人界^{にんがい}は無常にして会者定離なり

あるいは齡^{よわい}を重ね 病^{やまい}を受け終にあるいは思いもよらずたちまちに別離の悲しみを得ん

そのときにあたつて 藥効空しく

親族もなす術^{すべ}を持たず ただ愁嘆^{しゅうたん}の涙を流すのみされど 阿弥陀如来かねてしろしめして

攝取不捨の誓願を建て 光明^{くわうめい}を垂^たれたまう

宗祖聖人は 名残惜しく思へども娑婆の縁つきで力なくして終わるときに

かの土へは参るべきなりとも仰^{おほ}せなり

ここに法名釋○○ 大慈大悲に抱かれ往生を遂ぐ

希^{こいねが}はくは ただちに化益を垂れて穢国に還来し

我ら有縁を俱会一処の安養淨刹に導^{たま}き賜わんことを敬^{もつ}つて白す

勤行に用いる和讃

念仏のひとを撰取して
浄土に歸せしむるなり

大勢至菩薩の

大恩ふかく報ずべし (一一八)

還相の回向ととくことは

利他教化の果をえしめ

すなはち諸有に回入して

普賢の徳を修するなり (一五四)

娑婆永劫の苦をすてて

浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり

長時に慈恩を報ずべし (二〇五)

13. 次 第

今回あげた人生儀礼の中で、初参式・結婚式・葬儀については「法式規範」ならびに「葬儀規範」などを参照し、生前葬に関してはここでは葬儀の次第にならうことにする。

それ以外の次第は、定められたものがないため以下を共通次第とするがあくまでも一例である。

式の部

(本堂外陣にて)

- | | |
|-----------|----|
| 一、一同着席 | |
| 二、住職入堂 | |
| 三、作法の説明 | ※1 |
| 四、一同合掌礼拝 | |
| 五、はじめのことば | ※2 |
| 六、塗香 | |
| 七、三歸依文 | ※3 |
| 八、焼香 | |
| 九、記念品授与 | ※4 |
| 十、一同合掌礼拝 | |
| 十一、住職退出 | |

装束…正装第一種（色衣・五条袈裟・切袴）

荘厳…通常通り

朱蠟燭を用いる

場合によっては打敷をかけてもよい

●注

※1 塗香・焼香について説明する。

○塗香の説明…仏さまに対し敬いの心をあらわすたしなみとして香を体に塗る。

○焼香の説明…香を香炉に入れ香りをお供えし、また、あまたにいきたる薫で仏さまの慈悲のお心に触れる。

【作法】

受式者は参拝席に着座のまま住職から塗香を受ける。受ける際右手で念珠を左手の手首にかけ、左手で塗香を受け、次に左手を下にしたまま右手で静かにすりひろげ、両手で胸部をかくる二度なでおろし、手首にかけた念珠を右手で元に戻す。

次に、焼香卓へ進み一揖し左足より卓の前に前進し、押し頂かずに一度香をくべ合掌礼拝し、右足より後退し一揖し自席へもどる。

 法要の部

- 
- 一、行事鐘
 - 二、導師入堂
 - 三、導師登礼盤 導師に合わせ一同
合掌礼拝
 - 四、磬二音
 - 五、至心礼 起居礼
 - 六、磬一音
 - 七、表白 ※5
 - 八、磬一音
 - 九、勤行 ※6
 - 十、磬一音
 - 十一、念仏 ※7
 - 十二、和讃 一首または二首 ※8
 - 十三、回向 ※9
 - 十四、磬二音
 - 十五、導師降礼盤 導師に合わせ一同
合掌礼拝
 - 十六、導師外陣改座
 - 十七、法話
 - 十八、導師退出
 - 終了後記念撮影など

※2 「はじめのことば」として、解説文を参考にしたい
いただき、儀礼・儀式の意義や大切さを伝える。

※3 住職が一句ずつゆくり唱え、受式者はそれに
続く。

南無帰依佛 「南無帰依佛」
南無帰依法 「南無帰依法」
南無帰依僧 「南無帰依僧」

※4 記念品の準備が無い場合は省く。

※5 解説文に掲載の一例を参考にしたい。

※6 「讃仏偈」「重誓偈」「十二礼」など適宜選択。
七五三などには「しんじんのうた」「さんだんの
うた」「ちかいのうた」「らいはいのうた」を勤
めるのもよい。

※7 唱法は和讃六首引の五首と六首の間念佛をあて
る。

※8 解説文に掲載の和讃を依用し、読法は「浄土真
宗聖典―勤行集―」を参照のこと。
唱法は一般的な三重の節（恩徳讃一首引など）
にならう。

※9 唱法は和讃六首引の回向をあてる。

あとかき

浄土真宗本願寺派大阪教区重点プロジェクト第三期の成果を、こうして発刊できたことに、ご尽力をいただいたすべての方々に心より厚くお礼を申しあげます。

重点プロジェクト推進部会では、テーマを「人生儀礼」に設定し、二年間の活動をしてきました。この間、部会委員である先生方は、時には深夜にまでおよぶ会議で活発な意見のやり取りをし、また数々の研修会や協議会を開催し、そして本書の発刊が実現できました。

「人生儀礼」をテーマとして扱ったことの背景には、いわゆる冠婚葬祭の形態の近年における変化があります。推進部会では、前期まで「葬送儀礼」をテーマとして活動してきましたが、葬儀の簡素化・簡略化・無宗教化の原因には社会・経済的要因だけではなく、葬儀をあまりに宗派的側面から合理化してしまったことにも原因があるのではないかということが一つの論点でした。近現代に生きる私たちは、ものごとを「一つの原理」で説明できればできるほど、また「一つのかたち」で統一されればされるほど正しいと考える傾向にあります。このこと自体は間違いではありませんが、問題は説明や統一性から外れているものごとを、誤ったものとして断じてしまう点です。葬儀は、それぞれの宗教・宗派に所属する人にとってはそれぞれの教えに準じて統一性を指向するものでありながら、同時に各個宗教・宗派成立のはるか以前から全人類が培ってきた豊かな宗教的感性に基づくものでもあります。人類は、人の死を悼み、その死後のいのちに心を向け、未来に思いをいたし、その未来に対して、いま喜ぶという人類独自の感性を培ってきました。そうした、人間を人間たらしめてきた深い宗教的感性に立ち返り、葬儀だけではなく、人生儀礼もさらに問うてきたのが、今期のプロジェクトでした。葬儀が、人が人であるために必要な儀礼であるように、人生儀礼も人にとって必要な儀礼です。ただし、葬儀・人生儀礼に限らず、儀礼とは（宗教とは）、それが抑圧として機能する可能性を質的に備えています。また、先にも述べたように、各個の宗教・宗派により、それぞれの教え・思想運動とともに営まれてきているものでもあります。儀礼をテーマとして扱うということは、常にそうした関連の中に考察する作業でもあります。しかしながら、本書は宗派の教学的なことがらに対して、統一的な見解を示すためのものではありません。それぞれの人生儀礼に関して、理解するための資料、および捉え方と営みの可能性について示し、それぞれに活用して

いただくことを願い作成されたガイドです。なによりも、宗教を宗教ならしめてきた儀礼の重要性に、向き合っていくことを示すためのガイドです。

本書の刊行に際し、ご多用のなか巻頭言をお寄せいただいた大阪教区山本政秀教務所長ならびに「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会小倉雅昭委員長、会議をはじめとする全ての活動を支えてくださった事務局スタッフの大阪教区教務所安井英隆賛事ならびに上裕子主事、研修会・協議会が円滑に進むようにお手伝いいただいた大阪教区教務所職員みなさまに、感謝を申しあげます。

重点プロジェクト推進部会の高橋昭人副部长、藤溪英純副部长、浅井明部会委員、石原俊之部会委員、奥田龍悟部会委員、佐々木教英部会委員、潮留哲真部会委員、秦卓宏部会委員、濱畑僚一部会委員、芳浦淳部会委員、笠光暁部会委員には、会議・研修会・協議会での活動だけではなく、本書を刊行するために、それぞれに担当を決めて原稿執筆を担っていただきました。また、藤溪副部长、潮留部会委員、安井賛事、上主事には編集作業を担っていただきました。それぞれの大変な実務作業のおかげで本書が刊行できました。深謝申しあげます。

大阪教区重点プロジェクト推進部会部長 寺本知正

執筆者一覧

人生儀礼とは	寺本 知正
初参式	奥田 龍悟
七五三	寺本 知正
「お食い初め」	寺本 知正
入学式・卒業式	潮留 哲真
成人式	笠 光暁

結婚式

「同性婚」

「金婚式」

就職・転職・退職式（定年式）

新築・改築・引っ越し式

入院・退院

厄年

長寿祝い

生前葬

「自己満足の儀式ではない」

葬儀

「一日葬・直葬の増加」

「葬儀の新しい形」

全「表白」

「和讃」選定

「次第」作成

監修

写真・画像提供

イラスト

秦 卓宏

寺本 知正

寺本 知正

潮留 哲真

潮留 哲真

潮留 哲真

藤溪 英純

芳浦 淳

佐々木教英

潮留 哲真

浅井 明

藤溪 英純

藤溪 英純

石原 俊之

濱畑 僚一

高橋 昭人

寺本 知正、潮留 哲真、藤溪 英純

築地本願寺（目次・七五三）、交野組浄行寺（初参式）、河中南組恵光寺（入学式）、
相愛中学校・相愛高等学校（卒業式）、三郡組西性寺（成人式）、本願寺新報社（成人式）、
阿倍野組西光寺（結婚式）、河中南組光専寺（金婚式）、
安芸教区安芸南組西教寺（起工式・棟上式）、交野組本誓寺（祖師寿）
図書印刷同朋舎

記 録

重点プロジェクト「人生儀礼」協議会

「人生儀礼」第一回協議会

開催日 二〇一八（平成三十）年十二月四日（火）

テーマ 人生儀礼のもつ宗教性

講師 田口 祐子（開智国際大学非常勤講師）

丘山 願海（浄土真宗本願寺派総合研究所所長）

「人生儀礼」第二回協議会

開催日 二〇一九（平成三十一）年三月十四日（木）

テーマ 高齢多死社会における人生儀礼

講師 小谷 みどり（一般社団法人シニア生活文化研究所所長）

究所所長）

事務局

奥田 龍悟（東住吉組性應寺）
佐々木教英（茨田組明覚寺）
潮留 哲真（大阪南組徳浄寺）
秦 卓宏（阿倍野組西光寺）
濱畑 僚一（島上西組常見寺）
芳浦 淳（榎並組大巖寺）
笠 光暁（島上北組瑞應寺）

教務所長

山本 政秀

賛 事

安井 英隆

主 事

上 裕子

書 記

藤院 了南

「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会重点プロジェクト推進部会委員（二〇一八年度・二〇一九年度）

部 長 寺本 知正（西成組極楽寺）

副部長 高橋 昭人（大鳥北組善宗寺）

藤溪 英純（大阪東組光臺寺）

委 員 浅井 明（三郡組西教寺）

石原 俊之（豊島北組善福寺）

人生儀礼ハンドブック

～人生を豊かに彩るために～

二〇二〇年三月三十一日 発行

編 者

「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会
重点プロジェクト推進部会

発行者

「御同朋の社会をめざす運動」大阪教区委員会

印刷者

(株)図書印刷 同朋舎

発行所

浄土真宗本願寺派大阪教区教務所
郵便番号 五四一〇〇五三
大阪市中央区本町四一三 本願寺津村別院内
電話代表 〇六一六二六一六七九六